

死んだ穂波の横顔に¹⁾

長田穂波探索

阿部 安成

はじめ わたしにとっての 癩=ハンセン病 史研究は、「養生から衛生へ」という論題の原稿執筆を『岩波講座近代日本の文化史』（第4巻、岩波書店、2002年）において与えられたとき、19世紀後半から20世紀初頭にかけての生をめぐる文化史を考えるには、もう1つ「隔離へ」という契機と技術を組み入れ、そこで 癩=ハンセン病 を対象にすると適切な論述ができると考えたところから始まった。そののち、きちんと史料を収集するために13か所の国立療養所での調査をおこなうにさきだ²⁾、ともかくできるだけ多くの在園者からの聞き取りを実施するという課題を設けた。だがこの試みは、最初の訪問地とした国立療養所沖縄愛楽園（以下、各療養所名は沖縄愛楽園と略記する）で早くも頓挫してしまった。ちょうどハンセン病問題に関する検証会議（2002年発足）による聞き取り調査が始まっていたところで、許可を得たもの以外が聞き取りをおこなうことはできない、沖縄愛楽園の聞き取りはすでにある大学教授に依頼済みである、と同園の自治会会長から調査の実施が認められなかったのだ。

いまおもえば、そのころのわたしは、癩=ハンセン病 史をめぐって、これまでの研究動向をふまえて自分自身の歴史学を新しく回転させるために、聞き取りという手法を用いた歴史叙述を展望していたようだ。文字史料の補遺でも代替でもない記録として聞き取りを活用し、それをいわゆるオーラルヒストリーとは異なる領域の開拓につなげようとしていたようにおもう。それはいまだ手つかずなのだが³⁾。

¹⁾本稿は2009年度財団法人福武学術文化振興財団瀬戸内海文化研究・活動支援助成による研究題目「瀬戸内海域のハンセン病療養所における情報集積と交流」の成果の1つであり、別稿（「長田穂波遺稿 - 死んだ穂波が遺したものは」滋賀大学経済学部Working Paper Series No.129、2010年4月、「長田穂波の聖 - 消えゆくものども」同前No.131、2010年5月）と組みになる。

²⁾これは私立の療養所を調査しなくてもよいという見解表明ではない。調査の手順を示したにすぎないし、私立は国立よりあとでよいという方針を持ったということでもない。

³⁾ハンセン病をめぐり聞き取りの成果がいくつも報告されるようになった（たとえば、蘭由岐子『「病いの経験」を聞き取る - ハンセン病者のライフヒストリー』皓星社、2004年、網脇美智・加藤尚子

聞き取り調査ができないとなったところで、歴史学の定石どおり、文字史料の調査と収集をおこなうこととして、11か所の国立療養所を調査することができた。それぞれの療養所で、発行者や創刊時期が異なるものの、かならずどこでも逐次刊行物を編集し発行していたことが、すぐにわかった⁴⁾。それらはどれも、文芸、彙報、論説が掲載された、療養所における総合誌といつてよい体裁となっていた。これらの逐次刊行物を史料として利用していた先行研究はいくつもあり、だが、その使い方には、1つに、詩歌や小説などのいわゆる文芸をほぼ無視すること(あるいは、扱わないこと)、2つに、総合誌としての性格を考慮せずに研究者が自分の議論にみあう事実と認定したもののみを、その逐次刊行物の全体から切り離して引用すること、という特徴があるとおもようになった。

そういう観点をもって療養所内で発行された逐次刊行物をみてゆくと、多磨の北条民雄や長島の明石海人のほかにも多くの療養者たちが詩をつくり、短歌を詠んでいたことがあらためてわかった。著名人以外も療養所で創作の時間を過していたという、とてもあたりまえのことを、研究者などの観察者は気づかなかつたのだ⁵⁾。調査をつづけるなかで、わたしにとって気になった人物が、長田穂波という第四区療養所(のちに、大島療養所、国立療養所大島青松園と改称)で生きた思索者だった。いまではほとんど知られていない、忘れられた療養者である。

大島青松園の文化会館内にある入所者自治会編集室で保管されている、大島で発行された逐次刊行物の『藻汐草』に、穂波はいくつもの論稿を寄せていたし、同会館内の図書室には、数冊の彼の著書がならんでいた。大島での調査先をキリスト教信徒団体の霊交会教会堂に移すと、その図書室にあった機関紙『霊交』はほぼそのすべてが穂波によって編集されていたし、そこにはいつも彼の文章が掲載されていたとわかった。さらに教会堂図書室の書架で、たった1冊だけ残されていた穂

『もう一つのハンセン病史 - 山の中の小さな園にて』医療文化社、2005年、山本須美子・加藤尚子
『ハンセン病療養所のエスノグラフィ - 「隔離」のなかの結婚と子ども』医療文化社、2008年)、これらについてはいずれまとめて批評する予定である。

4) このときの調査報告に、阿部安成「療養所 という問い - ハンセン病をめぐるトポスとテキスト」(滋賀大学経済学部Working Paper Series No.85、2005年6月)がある。

5) こうした研究動向において皓星社による『ハンセン病文学全集』全10巻(2002年刊行開始、2010年3月1日時点で第5巻、第9巻が未刊)の刊行は大きな意義のある事業である。ただし同全集には第6巻(2003年)収録の「解説」のように疑義のある内容がある。たとえばそこでとりあげられた、森田進『詩とハンセン病』(土曜美術社出版販売、2003年)は解説執筆者の大岡信がいうほどに「ひろく推賞するに価する優れた本」なのか(これについては前掲阿部「長田穂波の聖」で論じた)。

波の日記が見つかった。そこでわたしは、13か所ある国立療養所のなかで調査地を大島青松園に定め、穂波と彼が属した霊交会、また彼も関与した自治会の歴史をたどることとした。膨大な量の文章を残しながら、いまではすっかり忘失されてしまった穂波のことが気になったのだ。

くりかえし大島にかようなかで、幸いにも、霊交会機関紙『霊交』のガリ版で刷られた初期の号もみつきり（ただし創刊号から1922年までの発行号がみつかっていない）穂波の著書や、彼の論稿が掲載された島外での刊行物、彼の未公開の手書き原稿も図書室内にあることがわかった⁶⁾。また、島外からの来訪者が霊交会に史料を寄贈する機会に偶然出会い、島内には残っていなかった穂波の写真をみられる幸いもあった⁷⁾。この小文では、その後の調査記録をまとめるとともに、穂波について、なにが、どのようにわかるようになっていったのか、その経緯を明示することに努めようとおもう。

長島愛生園図書館 穂波について調べるなかで1つ気がかりな情報があった。穂波の著書や、彼について記された文章の所在についてインターネットで検索すると、『ハンセン病文学全集』などを刊行している皓星社のウェブサイトがヒットし、そこにある「ハンセン病関係書籍目録稿」に、「1946・03・16 穂波追悼 宗教 石本俊市 ^(マ、マ) 霊光会 青松」との情報が記載されているとわかった（http://www.libro-koseisha.co.jp/top17/hanmoku_01.html、2010年2月8日閲覧。以下、引用文中の〔 〕内の表記はルビもふくめて引用者による）。おぼろげな記憶では、以前にこのサイトをみたときには確か、「愛生図書館」という情報もあったようにおもう。

わたしがこれまでに長島愛生園を訪ねた回数は4度となる。最初の2002年には大阪人権博物館の学芸員といっしょに同じ長島にある邑久光明園とあわせて、両園の概要をおおまかにみた。両自治会で古い文書や文献などの所在を尋ねたところ、光明園にはないとの教示を得て、そこではかつて園内でのみ通用していた通貨をみるていどにとどまり、また長島愛生園では宇佐美治さんにお話

⁶⁾穂波についてはすでにあらわした以下の論稿を参照。阿部安成「資料紹介 長田穂波日記1936年 - 療養所のなかの生の痕跡」(1)~(4完)（『彦根論叢』第370号、2008年1月、同第373号、同年6月、『滋賀大学経済学部研究年報』第15巻、同年11月、『彦根論叢』第375号、同年11月）同「史料紹介 長田穂波の痕跡 - 療養所の生のあらわし方」（『ハンセン病市民学会年報2008』ハンセン病市民学会、2009年）。穂波の手稿については前掲阿部「長田穂波遺稿」を参照。

⁷⁾この寄贈史料については、阿部安成「ゆくりなくも - 国立療養所大島青松園キリスト教霊交会2009年4月・5月調査報告」（滋賀大学経済学部Working Paper Series No.113、2009年6月）を参照。

をうかがったうえで、恩賜記念館をみることができた。その簡易スチール書架には、宇佐美さんご自身が整理をなさった古い文書や文献などがファイルに綴じられて配架してあった。そのときはまだ、穂波についてまったく知るところがなく、彼の文献を探すこともしなかった。

つぎの2005年の訪島時には、長島愛生園の神谷書庫をみせていただき、その概要を確認した。ついで翌2006年には、町田市立自由民権資料館の石居人也といっしょに、神谷書庫にある『靈交』など各地の療養所で発行された刊行物の撮影をおこなった。そのときは、愛生歴史館の展示をみたものの、そこにある図書などをみることはできなかった。

そして2010年2月の調査では、初めから愛生歴史館(旧本館)での調査を目的として訪島した。長島愛生園庶務課の田村朋久さんによる案内を得て、館内の図書やファイルは宇佐美治さんのご所蔵だったことを教えられ、さらに、隣接する現在の本館2階にある長島愛生園図書室を利用することができた。ここでわたしが図書を閲覧しているさなかにも、現役の医師が文献の閲覧にやってきた(もっとも彼がみたのは電子ジャーナルだったが)、これまでのわたしの療養所調査において、いままも医局勤務医によって実際に使われている図書室を利用したのは、これが初めてだった。いまままで訪おうとしなかった理由には、そこには医師が必要とする医学の文献はあっても、わたしがそれを使うことはないという先入観があったのだろう。田村さんからは、この療養所が管理する部屋が図書室で、もう1つ恩賜記念館が「患者」による図書館と呼ばれていたとの教示も得た。すると、さきの「ハンセン病関係図書目録稿」にいう「愛生図書館」は後者を指したのだろうか。

療養所では、その歴史をあらわす史料がいくつかの場所に分かれて管理されている。ただ、この保管のようすを分散と感ずるのは、外部から来た閲覧者のつごうによる実感なのであって、療養所にいるものたちにとってみれば、療養所内でそれぞれの時期にそれぞれの場所で編纂されたり執筆されたりした文章や、また日々の業務において作成された文書が、療養所事務所に、自治会に、あるいは教会などさまざまな団体に、またそれぞれの個人によって保存されているとすれば、それはとくに不思議ではない、あたりまえのこととなるだろう。

ばらばらにあるのでは、それは療養所外からの調査者にとっては不便なこととなる。だからそれらを一元管理せよと主張したり要望したりすると、それは、研究を旨とする部外者による横暴な振る舞いとなるとわたしはおもう。どうにも必要にせまられてそれらを療養所の内であれ外であれ一

か所にまとめるとなったときには、それぞれの図書や文書の所蔵者や管理者が十分に了解したうえで、あらかじめ、それぞれの場でなにがどのように保存されてきたのかをきちんと記録したうえで、それをおこなわなければならない。その記録がなければ、図書や文書と、それにかかわってきた人びとの歴史が末梢されてしまうからである。だがこの記録するという作業は、時間と手間がかかる面倒にはちがいない、それをだれがおこなうのが課題となる。人手がないからできない、となったときには、それもやむをえないとするか、もしくは療養所外のものがおこなうしかない。

わたしたちはしばしば、療養所内のそれぞれの場所で保存されてきた過去の記録に価値を与え、ときに選別し、そして評価することをおこなっている。たとえば、『ハンセン病問題に関する検証会義最終報告書』（日弁連法務研究財団ハンセン病問題に関する検証会議、2005年）の関連資料1の第2「国、自治体、園の所蔵資料」をみると、「長島愛生園には三か所の資料の宝庫がある。『愛生』編集部の書庫、神谷書庫、そして歴史館である」と記されているが、長島愛生園図書室にはまったくふれていない（もっともわたしもまだ『愛生』編集部の書庫を訪ねたことはなく、未調査場所があるのだが）、この「宝庫」の文字は、ほかの園の記述にはまるでみえない。長島愛生園のそれら3か所を「資料の宝庫」と呼んでよるこびたい気持ちは、いくらわかるが、大島青松園や菊池恵楓園には「宝庫」がないのか、他の療養所に資料所蔵場所があってもそれは「宝庫」と呼ぶに値しないのか、他園ではたんに充分には調査しなかっただけのことなのか、と問いたくなる。「宝」と評価するとき、それはだれにとっての、どういった指標による価値となるのだろうか。そうした判断の基準は、さきの最終報告書にはなにも明示されていない。

さて、長島愛生園図書室には、ワープロで作成された図書リストをバインダーファイルに綴じた『図書目録』が備えられていた。療養所本館（療養者がいうところの「役所」）にある図書室だけあってやはり逐次刊行物も図書も医学のそれらが多い書架に、『愛生』や『藻汐草』などそれぞれの療養所で刊行された逐次刊行物があるところも、療養所の図書室にふさわしい蔵書のぐあいだった。そうした書架に、いわゆる療養所文学、あるいは癩文学などと呼ばれることもある、療養所に生きるものたちが創作した作品もあった。これは、たんに寄贈された図書を残してきたままのようすなのか、医師や事務職員たちもそれらの作品に関心があったということなのか。神谷美恵子の蔵書をまとめた神谷書庫とはべつの療養所図書室にも、多数の文芸あるいは文学の図書が配架されていた

書架があることが、わたしには驚きだった。(もっとも、神谷書庫にある膨大な文芸や文学が、彼女にとってどのような意味を持ったのかも問わなくてはならないが)

新しい邂逅 長島愛生園図書室の書架は、どういう基準かは不明ながらも、いちおう分類がなされていて、29 - 5、30 - 3、30 - 4、に穂波などの作品があった。順に目録に掲載された情報を記すと、まず、29 - 5には、

穂波実相、長田穂波、日曜世界社、S13.9.15、11 - 5 - 114

福音と歓喜、長田穂波、聖約社、S25.12.18、11 - 5 - 87

があり、ここにはまた、大島にいた土谷勉の作品もともに4冊ずつ配架されていた。

癩院創世、土谷勉、木村武彦、S24.5.25、11 - 1 - 9

昔のらいのこぼればなし、土谷勉、厚生時報社、S25.4.20、914 - 癩 - 81

つぎの、30 - 3に、

燃ゆる心 (Storys of lepers by the Inland sea) HONAMI NAGATA、S13.6.27、11 - 4 - 9〔書名英語表記は目録原文のまま〕

そして、30 - 4に、

SOUL UNDAUNTED (大島青松園“詩”英訳) 11 - 4 - 10〔書名の英語表記は目録原文のまま〕

があった(いずれも『図書目録』では「書籍」の大分類のもと)

どれにも3連の分類番号が附記されているのだから、これらの書籍は、いちど分類整理がおこなわれたうえで、あらためて、29 - 5など2連の分類番号がふられたのではないかと推察できる。ここにある図書には、表紙にくる部分には「愛生図書館蔵書」、裏表紙となるところには「国立療養所長島愛生園」と印刷された幅3cmほどの青色の帯が巻かれているものがある。さらにたとえば、『穂波実相』の裏表紙には、「分類 | 文学作品 / 小分類 | 随筆 / 摘要 | / 番号 | 114」と項目名(ラベルの左側。空白は記載なしをあらわす。以下同)がタイプ印刷を元にガリ版で刷られ、それに手書きで記入(ラベルの右側)された、「長島愛生園」の名入りのラベルが貼付されている。現在の図書室に備えられているさきの『図書目録』にある3連分類番号の末尾の数字と「114」は一致する。

長島愛生園のばあい図書館と図書室の違いは、前者が在園者に、後者が療養所によって運営されて

いるところにあったということだが、そうするとこの『穂波実相』は前者から後者に移管された書籍となるのだろうか。それとも図書を保管する場所の名称をめぐって、室と館とが曖昧に混同されて使われていたのだろうか⁸⁾。

穂波の英訳詩集である『燃ゆる心』は現在、霊交会、熊本県立図書館内田文庫、国立ハンセン病資料館につづく4冊めの確認となった。長島にあった同書の帙には、「To Mr. Mitsuo Hamada / L. J. Erickson」の署名がある。訳者ロイス・エリクソンからの寄贈本である。『穂波実相』の表紙見返しには、「達意ノ文、多年練磨ノ効、驚ク可シ / 栗下信策殿」と記されている。これは、穂波の筆跡ではない。同書裏表紙の見返しには、「昭和十三年十月十五日 / 頂く / 栗下信策 / 金五銭^(か?)」とのサインもある(『穂波実相』の定価は70銭)。穂波の文章に感嘆しただれかが、栗下なる人物に贈った1冊なのだろう。栗下の経歴などの詳細はわからない。また、土谷の『癩院創世』の表紙見返しには、「贈呈」の印があった。土谷の著書はその2冊が4部ずつ配架されているので、これらは著者土谷自身からの寄贈本かもしれない。

さて、Souls Undauntedは、大島にはなかった1冊である⁹⁾。「Voices from THE CHRISTIAN POETRY CLUB at the HOSPITAL FOR LEPERS OHSHIMA, JAPAN」と活版印刷されている、ロイス・エリクソンによって英訳された、大島の療養所におけるキリスト教信徒による詩集である。出版は、ニューヨークのThe AMERICAN MISSION to LEPERSによっておこなわれた。同書には、Hayashi, Mumei, Ozaki, Yamamoto, Handa, Kawabuchi, Kanda, Utsunomiya, Takamoto, Shirano, Kida, Yamaguchi, Taniguchi, “Shinja”, Egi, Miyauchi, Nagata、による詩が収録されている。内容を吟味するまえに、これは連詩スタイルの詩集なのかとおもったが、英語表現による詩では、俳句にみられる1つひとつの句をつなげて全体で意味を持つようにする形式がないこと、よい意味で、アメリカ合衆国の読者が好みそうな、読者のこころをうつような詩を訳者が選択

⁸⁾ 名称の混同はほかにもあり、たとえば長島愛生園の神谷書庫もしばしば神谷文庫と誤って呼ばれることがある。わたしも誤記したことがあるし、同園庶務係長は2010年2月の調査にさきだって電話連絡をしたときに、くりかえし「神谷文庫」といていた。

⁹⁾ 正しくはこのとおりSoulsと複数形で表記。表紙には「11 / 4 / 10」のラベル貼付。2段めに(30-4)と追記があり、裏表紙にはさきの『穂波実相』と同様の「長島愛生園」ラベルがある。上から順に「文学作品 / 詩 / / 10」と記入されている。

してアンソロジーとしたのではないか、との教示を得た¹⁰⁾。

この執筆者名を判明したかぎり漢字表記にすると、順に、大島療養所にいた、林、無名(か?)、尾崎、山本、半田、河淵、神田、宇都宮、高本、?、喜田、?、?、信者(か?)、江木、宮内、長田となる。霊交会に詩の倶楽部があったという記録をわたしはみていない。倶楽部の有無はともかくも、1つの療養所から2冊もの英訳詩集の発信は稀有な事例である。しかも、東京の教文館が発行した『燃ゆる心』は、それが英語圏に届けられたかどうか不明なのだが、Souls Undauntedは、その発行地がニューヨークなのだから、海外で発信された希少な療養者の作品にちがいないのである。こうした詩集が、医局の図書室でみつかったことには、虚をつかれたおもいがした。

この図書室には、ガラス扉のついた書棚に納められた貴重書扱いの「資料ファイル」(大分類)もある。大分類のつぎにもう1段階の分類があり、そのうちの1つ「人物」のリストには、

穂波追悼、大島青松園霊交会、大島青松園、S21、118

があった。これがさきにみた皓星社による「ハンセン病関係書籍目録稿」の元データとなったのだらうとおもい、このときはこころが躍った。その目録稿にあった発行月日と石本俊市の名がこのリストにはないので、皓星社では原史料を確認したうえで、さきのデータを記したのかもしれない。だが、残念なことにこのファイルは、書棚にはなかった。以下、原史料がないもののリストには資料名があがっている大島についてのファイルの一部を示そう。まずは、「関係団体」の分類では、

大島療養所患者娯楽会規則、大島療養所、大島療養所、
、53

があり、「宣伝啓蒙・機関誌」では、

霊交、
、大島青松園霊交会、S2~12、25

が、「施設 患者自治会」には、

規則(常務委員会)、大島療養所患者自治会、
、S9、1

会則(自治会)、大島療養所患者自治会、
、S13、5

大島青松園患者自治会細則、自治会、大島療養所患者自治会、S13、6

協和会会則、大島青松園患者自治会、
、S29、12

会務処理細則、大島青松園患者自治会、
、S29、13

¹⁰⁾「英語で書かれた現代アイルランド詩」の研究を専門とする同僚の菊地利奈による。

があった。

大島青松園入園者自治会では、その創立 50 年を記念して自治会史としての『閉ざされた島の昭和史 - 国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』（大島青松園入園者自治会（協和会）、1981年）を編んでいる。そこには、自治会活動の重要な原則となるはずの会則は、たった1つしか掲載されていない（しかも制定あるいは改定の年次が記されていない）。大島の自治会については、『編集復刻版 近現代日本ハンセン病問題資料集成』補巻4（藤野豊編、不二出版、2004年）に規則が1点だけ収録されているにすぎず、改訂されているはずのその全貌がよくわからなかったのである。そうした史料の所在が不明だったところで、霊交会教会堂の図書室で自治会の規則などがみつかったのだ¹¹⁾。霊交会にあった文書と『図書目録』の記述とを照らしあわせてみると、昭和9年の規則とは、表紙に「昭和九年四月以降改正実施 / 大島療養所患者自治会規則 / 常務委員会」と記されたガリ版刷りの冊子で（前掲『編集復刻版 近現代日本ハンセン病問題資料集成』補巻4収録史料と同一）、昭和13年の会則と細則は、表紙にそれぞれ「大島療養所所長認可 / 昭和六年三月八日制定 / 大島療養所患者自治会会則 / 自治会」「大島療養所所長認可 / 昭和六年三月八日制定 / 大島療養所患者自治会細則 / 自治会」と記された活版刷りの冊子を指すと推察できる。霊交会所蔵史料のなかには、「大島療養所患者娯楽会規則」（年不詳）や1954年の「協和会会則」「会務処理細則」はなかった。

霊交會会員の三宅官之治、長田穂波、石本俊市のいずれもが、大島の自治会でそれぞれにその運営を担っていた。長島愛生園図書室の資料ファイルがみつければ、霊交會会員の自治会での役割や、自治会の活動がどのようにその根本で規定されていたのか、その一端がわかるだろう。

調査ののちに、長島愛生園の田村さんからのEメール（2010年2月19日付）により、資料ファイルの現存について教示を得た。『霊交』は「第7巻、98、99、101、216、220、222、229のみ」が、それ以外の資料ファイルは、「穂波追悼」をのぞいて原本を確認でき、さらに、

大島統計年報 T14 S2 S6

大島療養所案内 S5 S12

¹¹⁾これについては阿部安成「史料紹介 療養所における「自治」論の始線と史料の現在 - 大島青松園をフィールドとして」（『隔離の百年から共生の明日へ ハンセン病市民学会年報2009』ハンセン病市民学会、2010年）を参照。

大島青松園 絵葉書

もあったという。もっとも気になっていた「穂波追悼」は、残念なことに、依然として行方不明と
のことだった。だが、大島の自治会や娯楽会の文書が見つかったことは、大きな幸いである。

・・・資料調査の記録として本稿を残し、こののちハンセン病史研究をてがけるものへの参考と
するためにも、ここでは時間の順をおって資料のたどり方を記しておくとしよう。「穂波追悼」がみ
つかったのだ。長島愛生園図書室所蔵の文献を複写するために、その連絡を長島愛生園ととってい
るなかで、所蔵資料についての追加情報を得たのである（2010年3月16日付Eメール）。その内
容と考察はのちに記すとして、ここに2010年3月15日付消印の郵便で複写物が送付された、長島
愛生園図書室所蔵の大島青松園関係の史料を紹介しておこう（～の数字、a～の記号は阿部が
つけた。太ゴチックの分類は整理封筒に手書きで記されていた）

施設 / 患者自治会 / No. 1『昭和九年四月以降改正実施 / 大島療養所患者自治会規則 / 常務委員
会』、奥付なし、手書きガリ版、「国立療養所長島愛生園」の帯ラベル、「所蔵者 | 愛生図書館」と
活版印刷表記のある整理封筒入り

施設 / 患者自治会 / No. 5『大島療養所長認可 / 昭和六年三月八日制定 / 大島療養所患者自治会
会則 / 自治会』大島療養所患者自治会、香川県、1938年、表紙に「塚本」の印、「国立療養所長
島愛生園」の帯ラベル、「所蔵者 | 愛生図書館」と活版印刷表記のある整理封筒入り、「自治会会
員心得」（活版、1枚）挟み込み

施設 / 患者自治会 / No. 6『大島療養所長認可 / 昭和六年三月八日制定 / 大島療養所患者自治会
細則 / 自治会』大島療養所患者自治会、香川県、1938年、表紙に「塚本」の印、「所蔵者 | 愛生
図書館」と活版印刷表記のある整理封筒入り

施設 / 事業報告 / No. 8『大正十四年統計年報』大島療養所、発行年不詳、奥付なし、表紙に「日
本MLT」のスタンプ、「所蔵者 | 愛生図書館」と活版印刷表記のある整理封筒入り

同 『昭和二年統計年報』大島療養所、発行年不詳、奥付なし、「所蔵者 | 愛生図書館」と活版
印刷表記のある整理封筒入り

同 『昭和六年統計年報』大島療養所、発行年不詳、奥付なし、「所蔵者 | 愛生図書館」と活版
印刷表記のある整理封筒入り

宣伝啓蒙 / 一般 / No.12 「大島青松園案内」1930年、「国立療養所長島愛生園」の帯ラベル、
「所蔵者 | 愛生図書館」と活版印刷表記のある整理封筒入り

施設 / 患者自治会 / No.12 「協和会々則」手書きガリ版、年不詳〔実施年月日が昭和29年3月1日〕

施設 / 患者自治会 / No.13 「会務処理細則」手書きガリ版、年不詳、「所蔵者 | 愛生図書館」と活版印刷表記のある整理封筒入り

人物 / No.18 石本俊市『穂波追悼』石本俊市、1946年

宣伝啓蒙 / 機関誌 / No.25 『靈交会報』第7巻第9号、1926年か、手書きガリ版、表紙に「日本MLT」のスタンプ、同第98号、1927年2月か、同第99号、1927年3月、2部、同第101号、1927年5月、『靈交』第216号、1936年11月、同第220号、1937年3月、同第222号、1937年5月、同第229号、1937年12月、「所蔵者 | 愛生図書館」と活版印刷表記のある整理封筒入り

文学作品 / 随筆 / No.45 永見裕『癩人文学』著作集第1集、大島療養所患者慰藉会、香川県、1937年、「904/癩」のラベル、「愛生図書館蔵書 / 国立療養所長島愛生園」の帯ラベル、「国立療養所長島愛生園」と活版印刷表記のある整理封筒入り

関係団体 / No.53 「大島療養所患者娯楽会規則」年不詳、ペン手書き、「大島療養所」の縦罫紙、「所蔵者 | 愛生図書館」と活版印刷表記のある整理封筒入り

宣伝啓蒙 / 一般 / No.76 『大島療養所案内』大島療養所、香川県、1937年、非売品、「国立療養所長島愛生園」のラベル、「所蔵者 | 愛生図書館」と活版印刷表記のある整理封筒入り

文学作品 / 随筆 / No.89 飛谷俊雄『大島の冬』農村文化社、香川県、1951年、非売品、「911/癩/3」のラベル、「長島愛生園図書室」のスタンプ、「愛生図書館蔵書 / 国立療養所長島愛生園」の帯ラベル、「国立療養所長島愛生園」と活版印刷表記のある整理封筒入り

宣伝啓蒙 / 一般 / No.136 「概況書 / 昭和30年4月1日現在」国立療養所大島青松園、「国立療養所長島愛生園」の帯ラベル、「所蔵者 | 愛生図書館」と活版印刷表記のある整理封筒入り

宣伝啓蒙 / 一般 / No.155 「国立療養所 / 大島青松園」絵葉書封入 a 「大島全景（航空写真）」、b 「所属船まつかぜ / 入園者住宅全景」、c 「浜辺の憩い / 雲井寮より五剣山を望む」、d 「野島園

長ノ事務本館、e「医務本館ノ薬局、f「入園者事務所ノ恩賜会館、g「重症病室ノ夫婦舎附近、
h「キリスト教会ノ大師堂、¹²⁾「愛生図書館蔵書ノ国立療養所長島愛生園」の帯ラベル、「長島愛生園」のラベル(「分類|宣伝啓蒙ノ小分類|一般ノ摘要| / 番号|155」)「所蔵者|愛生図書館」と活版印刷表記のある整理封筒入り

これらは、園が発行した(統計)(案内)¹²⁾、(概況書)(プロミン以降の時代の絵葉書) 霊交会による、自治会関係の、文芸の にわけられる¹³⁾。霊交会機関紙『霊交』の手書きガリ版刷り時代の第7巻第9号(表紙の題字は「霊交会報」、1926年8月発行か)は、大島にない号である。自治会関係の は大島の霊交会が所蔵しているものと同じだが、ただし、霊交会所蔵の には書き込みが、 には正誤表が、 には扉がある(長島愛生園図書室の には1-2頁が落丁)、 と に挟み込まれた「自治会会員心得」とは大島でみつからない。この3点(ないし4点)の記録の大島外での発見は、大島の療養所における自治について、あたらしい知見をもたらすだろう。それはまたべつに論じることとする。

ふたたびの寄贈 前掲阿部「ゆくりなくも」に記したとおり、2009年4月に霊交会に史料の寄贈があった。それは、かつて大島をいくども訪れ、霊交会の三宅、穂波、石本とも交流があった橘新^{はしめ}の手元にあった逐次刊行物と写真などだった。2010年2月に大島へゆくと、ふたたび寄贈があったと霊交会代表から知らされた。それは、「霊交会誌ノ昭和八年~十五年」と記された封筒に入った『霊交』と、それとはべつな袋に入った『清流』^よだった。の封筒には、「二〇〇九年四月に青松園へ持参した残り」とも記されてある。橘のお孫さんからの追加寄贈だ。

なお、この『霊交』も『清流』もどちらも、紙がいちじるしく変色し、クロワッサンの表面のよにばらばらと崩れやすいほどに劣化していた。それにくらべると、霊交会教会堂図書室で保管されてきた『霊交』も、また藁半紙刷りの『報知大島』もとても状態がよい。これは、長いあいだほぼだれの手にも触れられることなく、仕舞い込まれていたからだ。寄贈された図書をみることによって、とくに劣悪な環境でなくとも、60年もすれば酸性紙がこれほどに傷んでしまうことを、霊交

12) はリーフレット。冊子体の は藤野豊編『近現代日本ハンセン病問題資料集成』補巻4大島療養所自治会日誌(戦前編)(不二出版、2004年)に収録されている。

13) まえに記したとおりこれらの史料が収められた整理封筒には「所蔵者|愛生図書館」との印字があり、また「愛生図書館蔵書」と印刷された帯ラベルが貼られているものもある。長島愛生園における図書室と図書館のちがいはあらためて探求の課題になる。

会の方々にも理解していただけた。

には『靈交』が6つにまとめられている。()「十三年」の附箋がつけられクリップで綴じられた、第230号(1938年1月10日)から第237号(同年8月10日)までの5部(第233号~第235号は欠)、()バラの第239号(1938年10月10日)と第241号(1938年12月10日)の2部、()「揃っていない分/十四年」と記された附箋がついてクリップで綴じられた、第243号(1939年2月10日)、第245号(同年4月10日)、第248号(同年7月10日)~第250号(同年9月10日)の8部(第248号~第250号は2部ずつ)、()パンチ穴をリボンで結んだ、第242号(1939年1月10日)~第253号(同年12月10日)の12部、()同様にリボンで綴じられた1939年発行分で3月、5月、10月、11月発行分が欠けた8部、()「揃っていない分/15年」の附箋がつき、パンチ穴をリボンで結んだ分にくわえ、クリップで留めた第254号(1940年1月10日)~第265号(同年12月10日)までのうち5月と6月発行分をのぞく10部にくわえ、同年2月号(2部)、3月号(2部)、7月号(2部)、8月号(2部)、9月号、11月号、12月号の11部をあわせて22部、である(附箋の年表記はいずれもマジックインキで、それ以外はすべて鉛筆書き)。袋の書きとその内容とは、かなり異なる。

の『清流』は、すでにべつの稿に記したとおり¹⁴⁾、矢内原忠雄による穂波への弔辞ともいべき文章において、「君の畢生の大作は『灯火を翳せる者』と題する長篇の詩」と紹介された穂波の作品が載った逐次刊行物である。穂波のその長篇詩は、すべて書き終えられ、内田正規が「その初めの部分を『清流』誌に掲載したが『清流』廃刊と共に中絶した」と矢内原によって記録されていた、全編刊行とはなっていない作品である。その掲載誌の『清流』は、NDL-OPAC、NACSISのWebcat Plus、同誌発行地岡山の岡山県図書館横断検索において、まったくヒットしなかった逐次刊行物だった。それがまたゆくりなくも靈交会に寄贈されたのである。いまのところ『清流』は唯一、靈交会にあることとなり、しかもその現存分の多くが、穂波の作品が掲載された号だった。靈交会に寄贈された14冊の『清流』をみると、そのうちのいくつかに「橘」の印が押されてあった。

いまでは靈交会所蔵となった『清流』14冊の書誌情報を以下に示そう(内の数字表記は原本表

¹⁴⁾阿部安成「大島の生、島をめぐるレターズ - 香川県大島の療養所を場とした知の動態」(滋賀大学経済学部Working Paper Series No.109、2009年4月)。矢内原はみずから発行する逐次刊行物の『嘉信』誌上で『清流』の紹介もおこなっている(第4巻第7号、1941年7月20日)。

紙の記載のまま)

第1巻第3号、3、10月号、1941年10月20日発行、定価30銭

編輯兼印刷発行人岡山県上道郡砥神村438内田正規、発行所岡山県上道郡砥神村河本清流社
長島愛生園の玉木愛子による「秋雑詠」、同園の和久井笑山「病床閑筆」、穂波の「ほつといてくれ」(詩)掲載

表紙に「橘」の押印

第2巻第1号、第4号、1月号、1942年1月1日発行、定価30銭

編輯兼印刷発行人岡山県上道郡砥神村438内田正規、発行所岡山県上道郡砥神村河本清流社
長島愛生園玉木愛子と星塚敬愛園湧上黙人の俳句、穂波「病童のSS / 初の集り」(「小品」)を掲載

表紙に「橘」の押印

第2巻第2号、5、3月号、祈の友合流号、1942年3月28日発行、定価30銭

編輯兼印刷発行人岡山県上道郡砥神村438内田正規、発行所岡山県上道郡砥神村河本清流社
長島愛生園玉木愛子と星塚敬愛園湧上黙人の俳句を掲載

「当局の懇懇によつて「祈の友」と本誌と統合させられ」

表紙に「橘新」の押印

第2巻第4号、第7号、7月号、1942年7月1日発行、定価30銭

編輯兼印刷発行人岡山県上道郡砥神村438内田正規、発行所岡山県上道郡砥神村河本清流社
長島愛生園玉木愛子と星塚敬愛園湧上黙人の俳句を掲載

「本号より止むなき事情で減頁した」「発行八隔月一日」

第2巻第5号、第8号、9月号、1942年9月1日発行、定価30銭

編輯兼印刷発行人岡山県上道郡砥神村438内田正規、発行所岡山県上道郡砥神村河本清流社
長島愛生園玉木愛子と星塚敬愛園湧上黙人の俳句を掲載

「祈の友会はその後、私の手を離れ、「シオンの友」と改名して清新なる再発足をしてゐる」

第2巻第6号、第9号、11月号、1942年11月1日発行、定価30銭

編輯兼印刷発行人岡山県上道郡砥神村438内田正規、発行所岡山県上道郡砥神村河本清流社

穂波「灯火を翳せる者(一)」、星塚敬愛園花見かをる「祈に生きる」、同園小野秀一の短歌と詩(「義足」)、同園湧上黙人の俳句を掲載

「本号から長田穂波兄の畢生の大作が連載されます。内容から言へば三界遍歴のダンテ神曲を想はずもの、我国では藤井武先生の「羔の婚姻」以外にかゝる類のものを知りません。本号のは第一章の前半、約十章の予定/本誌もこれで基督教文学の使命にも副ふ事が出来ると喜んでゐます、この原稿はペンを手にくゝりつけての執筆であり、既に一年に亙る構想によるもの」(「河畔雑記」)

「発行八毎月一日」

表紙に「橘」の押印

第2巻第7号、第10号、12月号、1942年12月1日発行、定価30銭

編輯兼印刷発行人岡山県上道郡雄神村438内田正規、発行所岡山県上道郡雄神村河本清流社

長島愛生園和久井笑山「盲に聴く」と俳句(「盲」)、同園玉木愛子の短歌(「冬籠り」)、穂波「灯火を翳せる者(二)」、星塚敬愛園花見かをるの詩(「散歩」)を掲載

「「盲に聴く」も実にいゝ。淡々たる筆致で読者を微笑させながら、深いものが書かれてゐる。この人や、長田兄、玉木姉、花見姉など、あの重い軛を負ひながら、この様に明るくい力強いものが書かれる処が信仰であらう」(「河畔雑記」)

第3巻第1号、第11号、1月号、1943年1月1日発行、定価30銭

編輯兼印刷発行人岡山県上道郡雄神村438内田正規、発行所岡山県上道郡雄神村河本清流社

穂波「灯火を翳せる者^(マ)(二)」、長島愛生園玉木愛子の俳句、星塚敬愛園湧上黙人の俳句、同園小野秀一と松並一路の短歌を掲載

「本誌は本年度より毎月発行の予定でしたが、許されないさうですから、従前の如く随時発行としてぽつぽつ出します」(「河畔だより」)

「次号発行三月一日」

第3巻第2号、第12号、3月号、1943年3月10日発行、定価30銭

編輯兼印刷発行人岡山県上道郡雄神村438内田正規、発行所岡山県上道郡雄神村河本清流社

穂波「灯火を翳せる者(四)」、星塚敬愛園花見かをるの詩(「不自由者日記」)、沖縄愛楽園の伊波



一男の短歌、長島愛生園玉木愛子と星塚敬愛園
中村安朗の俳句を掲載

「次号原稿〆切三月末日発行五月一日」

第3巻第3号、第13号、5月号、1943年5
月20日発行、定価30銭

編輯兼印刷発行人岡山県上道郡砥神村438内
田正規、発行所岡山県上道郡砥神村河本清流社
穂波「灯火を翳せる者(五)」、長島愛生園和久
井寛人「さいはひなる一日」、同園玉木愛子の俳
句、星塚敬愛園花見かほるの詩(「大地を歩め」)
を掲載

「次号原稿〆切五月末日発行七月一日」

第3巻第4号、第14号、7月号、1943年7月20日発行、定価30銭

編輯兼印刷発行人岡山県上道郡砥神村438内田正規、発行所岡山県上道郡砥神村河本清流社
長島愛生園玉木愛子の俳句、穂波「灯火を翳せる者(六)」、伊波一男と花見かをるの短歌、
「次号原稿〆切七月末日発行九月一日」

第3巻第5号、第15号、9月号、1943年9月10日発行、定価30銭

編輯兼印刷発行人岡山県上道郡砥神村438内田正規、発行所岡山県上道郡砥神村河本清流社
長島愛生園玉木愛子の俳句、穂波「灯火を翳せる者(七)」を掲載

第3巻第6号、第16号、11月号、1943年11月15日、定価30銭

編輯兼印刷発行人岡山県上道郡砥神村438内田正規、発行所岡山県上道郡砥神村河本清流社
穂波「灯火を翳せる者(八)」、鳥羽光子「癩者に」、玉木愛子の俳句を掲載

「 本号の「癩者に」の詩を読んで私は涙が流れた。私も亦神とか靈魂とかきこえよき言葉をあ
やつつてゐないか。凡ての重荷に喘ぐ人々に頭を垂れるべきではないのか。主イエスは十字架を
背負つて悶死し給ふたのだ」(内田生「凡人通信」)

第4巻第1号、第17号、1月号、1944年1月1日、定価30銭

穂波「灯火を翳せる者(九)」、長島愛生園玉木愛子の俳句、鳥羽光子の「うつはの歌」を掲載

「本誌は毎号を終刊号のつもりで編輯してきたが、最近は何の情勢から愈々その感が深い。近頃不思議に新読者が増加して、思はぬ所で喜んで読まれてゐるのは嬉しく、出来れば続けたいと思ふけれど、一切はみこころの儘である。事業ではなく信仰であり、読者も最後の一冊は聖書そのものであるから」(内田生「凡人通信」)

「次号原稿〆切一月末日発行三月一日」(「原稿募集」)

『清流』の創刊号と第2号がないので、どういった発行形態で刊行が始まったのかがよくわからない。第7号に「発行八隔月一日」と記されたとおり、しばらくは隔月刊だった同誌は、その第9号で「発行八毎月一日」と告げられ、月刊が第11号まではつづく。1943年からは「毎月発行の予定でしたが」「許されないさうですから」と告げて、「従前の如く随時発行としてぼつぼつ出します」と、次の号は1か月おいた3月1日発行予定だと告げられていた。その理由は示されていない。それから隔月刊がつづいて第11号から第16号までの6冊が発行された1943年が明けると、1944年1月発行の第4巻第1号では、その月末を締切とした原稿募集を掲げたのだから、発行の継続を危ぶみながらも、次号の見通しは持っていたはずである。だが、清流社は同号発行年月日と同日の1月1日付「社告」で、『清流』の終刊を告げることとなる。「清流第17号附録」として同号に挟み込まれていた、内田正規によるガリ版刷りの「社告」には、

清流誌は本号を以て急に終刊号とする事になりました。国家の出版印刷整備の要請と、編者の病状により継続が許されなくなりましたので、茲に一切を主に委ね、神にお返しし、読者の御諒承を願ふ次第であります。 /〔中略〕新読者には申訳なく、未完原稿にも真に相済まない次第ですが、主御自身により豊かにあしらはれん事を祈ります。 /創刊当初の抱負を思へば恥しく、悲しくてなりません。

と記されている。通巻第17号で終刊となった『清流』は、現在、第1号、第2号、第6号を欠号として霊交会で保管されることとなった。題字はすべて黒崎幸吉による。これまでまったく所在のわからなかった逐次刊行物が閲覧できるようになった幸いをよろこびたい。ただし、穂波の長篇詩は、矢内原が記したとおり、『清流』の終刊によってそのおよそ前半部(第5章まで)しか公表されずに埋もれてしまった。『清流』に掲載された穂波の文章を、本稿の末尾に全文掲載しよう。



穂波への哀惜 穂波が存命のうちに、逐次刊行物に掲載された活版印刷による彼の論稿は、『清流』1944年1月号の「灯火を翳せる者(九)」が最後となった。穂波が亡くなったときにはすでに、霊交会の機関紙である『霊交』が1940年12月に廃刊となり、また、園内発行の総合誌である『藻汐草』も1944年6月に休刊となり、大島青松園内では活版印刷の逐次刊行物はもはやなく、活字の媒体で穂波の死がどのように悼まれたのか、それを知る術はない。

刊行物ではなく手書きの原稿で、石本俊市による穂波への弔辞とみえる文章が、2008年の9月

に霊交会教会堂図書室の書棚でみつかった¹⁵⁾。冒頭に「後記」と記されたその文章の全文を、ここに載せよう(下線は原文で末梢線があったことを、太字は挿入された文字をあらわす。傍点は原文のとおり)。

後記 / 永年の間、主に在りて特別の御厚情を頂いておりました、長田穂波教兄は遂に天父の御許に召されました。彼の生前、信仰によれる**皆様の**御交誼を深く感謝致します。 / 吾が霊交会は大正三年十一月十一日、僅か五、六名の兄弟達によつて創立せられ、その創立当時の兄弟達のうち、長田兄は唯一人の生存者でありましたが、その残されたる最後の一人をも神は地上よりから取去り給ひました。 / 三宅官之治大兄を昭和十八年三月十一日に、宮内岩太郎先生を十九年十二月二十一日に、今また長田兄を、斯く次から次と教師を、父を、母を失ひし如き寂しさを、吾々霊交会員は覚えてあるのでございます。 / 長田兄は、多くの著書や通信により福音のよき証をせられましたが、彼が全精力を傾注せられた『霊交』誌は大正七年頃毛筆によつて僅か十部ばかり発行、それから複写紙にで二十部余り、その次は謄写版にで七、八十部、それから印刷になつ

¹⁵⁾このとき同じ場所でみつかった穂波の手書き原稿については前掲阿部「長田穂波遺稿」を参照。

て一千部まで出すやうになりましたが、それも決して楽な道ではなく、ありませんでした。殊に戦時になつてからは其の筋の検閲の眼は鋭く光り、始末書を書かされたこと数度、或は反戦思想なりと難癖をつけられて取消しを命ぜられるなど、あらゆる圧迫下によく闘ひ続けたが、遂に昭和十五年十二月廃刊を命ぜられた。彼の廃刊之辞に『神の事業として発行してより第二百六十五号、今時局柄国家の命を受け、廃刊のやむなきに至つた。さながら愛娘の死にのぞむ如き痛みと淋しさとを覚ゆる。然し国家の爲めの一言には何をか言はん。ただ従ふのみ』とある。再読して切々の情あらたなるものがございあります。尚本記念印刷が靈交誌の残り用紙に / 長田兄の書きしいた福音の証者三宅清泉大兄の伝記『永生の輝き』が原稿のまま、又『灯火を翳せる者』も岡山の内田正規先生の『清流』に第四巻まで発表せられ、第五巻よりから拾巻までもが原稿のまま寂しく取残されてゐます。 / 靈交会員が一番多い時には七十名ばかり（入園者七百二、三十名の時）でありましたが、現在は四十四名（入園者五百名余）にで、何時も全病友の約一割弱であります。この外に長田兄までで天国へ九十七名送りました。 / 長田兄なき後も靈交会は健在にで、皆益々信仰にいそしんでゐますが燃え、主に在つて変らざる御支援と御祈禱の程、切に御願ひ申し上げます。 / 日曜の集會も礼拝には林文雄先生を始め官舎の方々もが六、七名御出席下され、会員も平均二十名ばかりが出席し、夕禱會も毎日持ち続けてゐます。長田兄が一番愛して居られた子供達がその後淋しがつてゐますので、林先生が『穂波子供會』を毎日曜に開いて下さつてゐます。 / 御來訪者に粗茶一服も差上げることのできない私達は、『長田兄のお話を唯一の御馳走』と致してゐたのですがに、向後はその福音の御馳走も差上げられませんので、御來訪下さるお方々もお淋しく物足りない事と存じます。ないのが遺憾ですが、今後とも / この記念号を出版致すに当り、林文雄先生が編輯から印刷の交渉、校正など一切の労をおとり下さいましたことに対しまして、満腔の感謝を捧げる次第でございます。（石本生）

こゝに遺稿数篇 / 彼の発表した最後の論文は、園内回覧誌青松十二月号の「新日本建設と青松園」であります。これは十二月九日最後の聖日の故鉄林姉追悼説教「天国の讃歌」速記と共に、日本救癩協會楓の蔭誌二月長田氏追悼号に掲載されるので本誌他日遺稿と合てには割愛しました。将来全集又は選集編纂をの時に譲ります。期して居ります。こゝに遺稿数篇を印刷し諸氏の兄姉の絶えざる御高配に対し故人対する御愛顧に対し感謝の微意と表する次第であります。尚こ

の用紙は霊交誌の残物とてある事も良い記念でありませう。 / 石本俊市



この原稿は、「石本俊市様 / 御許」と墨書された新聞にくるまれた逐次刊行物のすぐ近くにおかれてあった。20字×10行が2面で1枚となる原稿用紙に、ペンで記された原稿である。修正が墨書で入っている。「園内回覧誌青松」とは、『藻汐草』が休刊となったその年の11月から手書きでつくられた『青松』を指す。わたしたちはこの手づくり回覧雑誌を、2009年6月に閲覧し始めることとなる¹⁶⁾。

もう一誌、「日本救癩協会楓の蔭誌二月長田氏追悼号」とある。この『楓の蔭』は継続前誌が『日本MTL』で¹⁷⁾、2009年には『編集復刻版 近現代日本ハンセン病問題資料集成』(不二出版)の補巻18と19が刊行され、そこに収録された『日本MTL』第94号~第116号と『楓の蔭』第27号~第170号(補巻18)、『楓の蔭』第172号~第264号(補巻19)がみられるようになった。た

¹⁶⁾手書き版『青松』の解題と記事索引は、阿部安成・石居人也「後続への意志 - 国立療養所大島青松園での逐次刊行物のその後」(滋賀大学経済学部Working Paper Series No.116、2009年9月)を参照。

¹⁷⁾NDL-OPACでもWebcat Plusでも『日本MTL』『楓の蔭』ともに復刻版以外はヒットしない。国立ハンセン病資料館では図書室所蔵資料の蔵書検索を試験公開している(2010年4月30日閲覧)。それによると『日本MTL』と『楓の蔭』を1926年から1970年までの発行分を所蔵している。ただし欠号があり、そのかんのすべての号があるわけではない(欠号情報にも不備あり)。

だし、この資料集成の「編集部」名で、「原本未見のため、次の号は収録できなかった。所蔵先をご存じの方はぜひご教示賜りたく、お願い申し上げます」との注記があり、そこに『楓の蔭』第173号(1946年2月)があがっていた。

穂波の死は、大島のなかで回覧されていた手書き版『青松』と、大島の外で発行された『楓の蔭』と2つの紙上で悼まれたのだが、両逐次刊行物のうち、穂波の追悼号となったという『楓の蔭』は、いまのところその所在がわかっていない。

大島青松園内で回覧された手書きの『青松』は、その誌上で組まれる重要な特集に、故人となった療養者の追悼があった。穂波は、かつて『藻汐草』誌上に連載し、「青松一週年記念号」の『青松』1945年11月発行号からふたたび連載を始めた「松籟海鼓」の再開第2回を、「故大塚一氏追悼号」となった1945年12月発行の『青松』第15号に寄稿し、それに「新日本建設と青松園の巻」の題をつけた。さきに石本が記したとおりである。この穂波の手書きによる論説が、彼の絶筆となったとみてよい¹⁸⁾。『青松』第15号の発行日は同誌に記載がなく、『青松』はもともと発行日が一定していない。同誌の発行と穂波の死没の、どちらがさきかはわからない。

1945年12月18日に亡くなった穂波の追悼号は、1946年1月制作の『青松』誌上に編まれた。この月は、第16号、第17号、第18号の3つの『青松』がつくられた慌しいときとなった。穂波追悼号は第17号である。第17号収載記事の索引を再録しよう。(* は執筆者名が不明であることをあらわす。〔 〕内は推定の内容を示す)

〔穂波遺影〕 / 「昭和二十年九月第三主日 / ヘブル書第九章の感話 / 「我等の祭司」 / 霊交会小羊 / ほなみ」〔穂波手書き原稿後欠〕 / * 「目次」 / 〔穂波肖像写真 背景にクリスマスツリー〕 / 勉「巻頭言」 / 長田穂波「新日本建設と青松園」、長田穂波「ラザロ死ねり」清記多田勇 / 園長野島泰治「偉人「長田穂波」」清記岩瀬弘美 / * 「わが大空(穂波実相より)」 / 医官林文雄「臨終前後」1946.1.14 記 / 石本俊市「追悼感話」 / 小見山和夫「長田穂波氏をいたむ」12.29 / 笠居誠一「故長田教兄を憶ふ」1.19 夜記 / 大原枝風「路傍の説教」 / 上野青翠「長田さんの思ひ出—

¹⁸⁾ 穂波の未公刊原稿などが歿後に『楓の蔭』紙上に掲載される。これについては別稿「穂波遺稿」を参照。

ツーツ」/三木康平「笛」/土谷勉「故長田大人を語る座談会/於会議室昭和二十年十二月二十三日十三時より」/＊「長田大兄追悼詩作品序/七篇」/岩瀬弘美「長田大兄を偲ぶ詩」/斉木生「故長田大兄追悼詩ノ一/伽の夜」1945.12.18夜作/斉木生「故長田大兄追悼詩ノ二/暗中摸索」/斉木生「続、伽の夜」1945.12.18更/浅野繁「謹しみて長田大兄の御霊に捧ぐ」/＊「一月下旬作業状況」/松田美津夫「詩/“紅梅一輪”、美津夫“昇天三日後”」/久我剛「詩 聖者の昇天」/＊「長田大兄追悼短歌作品序」/笠居誠一「短歌」/久我剛「短歌 長田大兄へ」/岩瀬弘美「短歌/長田さんを偲ぶ」/浅山稔「傷心」/斉木操「長田大兄を悼む歌」/赤沢正美「追悼歌」/泉俊夫「短歌 故長田大兄に捧ぐ」/綾井譲「噫長田大兄の霊に捧ぐ」/浅野繁「長田大兄を悼む」/＊「靈魂は羽ばたく(穂波著、昭和三年出版、光友社)」/賀川豊彦氏の序文の一節」/小見山和夫「短歌/長田穂波氏をいたみつゝ」/＊「長田大兄追悼俳句」/香山爽子「俳句/長田大兄急逝を悼む」/熊野梅香「俳句/故長田大兄を偲びて」/藤田薫水〔俳句〕/辻長風〔俳句〕/喜田正秋「追悼句」/大原枝風「俳句 夜警」/多田勇「長田氏追悼句」/大田井春峰「故長田穂波氏追悼句」/＊「長田さんと子供の頁」/小見山和夫「長田さんと子供」/浅野繁「子供たちに与ふる詩」/初四須内喜代香「長田先生」/高二岡崎安彦「長田先生」/高二赤松清子「長田先生」/＊「蟹(童謡)雲なき空より」/高二山上広光「長田先生」/初六畠山亮「長田先生」/高一山口忠夫「長田先生」/初五中井八千代「長田先生」/浅野繁「学園記(一回)」/＊「大波小波(童謡)雲なき空より」/＊「経過報告」/総代石本俊市、代理今井比沙志「弔辞」1945.12.19/大島キリスト教霊交会林友吉「弔詞」1945.12.19/誠一「骸が語る(靈魂は羽ばたく)より」/＊「青松別冊/起上る高松 林文雄/米兵の見た愛樂園 内田守人寄稿」/勉「あとかき」

本号は、「巻頭言」と「あとかき」を執筆した土谷勉の編集とみてよい。ここには、穂波の肖像写真が2葉、『青松』同人や霊交会会員など多くの人びとの追悼文、子どもたちをふくみ広く在園者から寄せられた穂波をおくる詩歌、穂波の作品の転載や未発表稿(上記目次に下線を引いた)の収録があり、そして穂波を語る座談会記録が載る。

まず、「経過報告」の全文を転載しよう。

昭和二十年十二月十六日九時ノ一、心嚢炎の為、香川寮に入院、絶対安静を期す

十二月十八日八時ノ一、主任会議 = 特別功勞者として遇し、特別看護を付す件を決定

〃 十二時半ノ一、特別功勞者として遇する件を、総代はラジオを通じ一般會員に報告

十二月十八日二時ノ一、心嚢炎にて急逝

十二月十八日八時よりノ一、協議会 = (主任評議員) 特別功勞者として協和会葬の礼を以て送る件を決定、直ちにその手続を執る

〃 十二時半よりノ一、協和会葬の礼を以て送る件を、総代はラジオを通じ一般會員に報告

十二月十九日十三時よりノ一、葬儀執行ノ序 司会、半田市太郎ノ賛美歌 五四、一節二節ノ開会の祈りノ聖書 ヨハネ伝第十四章一 - 六ノ弔辞 総代、園長、靈交会代表ノ献花 総代、園長、籍元室長、靈交会代表、評議員会及協力会代表、聯合奉仕団長、各宗教代表ノ遺稿朗読 林文雄博士ノ追悼感話 石本俊市ノ故人の御靈に対し黙禱ノ閉会の辞

十二月二十三日^(マ)九ノ一、追悼祈念祭(協和会主催)ノお供として一般會員に甘藷一人三百匁宛配給

十二月二十三日十二時半よりノ一、「長田大兄を語る座談会」開催。

十二月三十日九時より(協和会総代)ノ一、追悼祈念祭(靈交会主催)

昭和二十一年一月十八日十三時よりノ一、「長田大兄を語る座談会」(靈交会主催)

死因が心嚢炎だった穂波の葬儀は、協和会と名をかえた自治会によって執行された。自治会葬はすでに、三宅官之治に対してもおこなわれていたので、おそらくこれで2度めとなるのだろう¹⁹⁾。医官林文雄が朗読したという「遺稿」は、穂波の「新日本建設と青松園」で、これは、『青松』第15号に掲載されたそれを抄録して同誌第17号に載せた版とおもわれる²⁰⁾。抄録版の冒頭には、これが「抜粋」であることと、葬儀で「朗読」されたこと、「一読、遺書トシテ胸ヲ打ツモノアリ」との感想が記されてある。石本の「弔辞」と「追悼感話」は、さきにその全文をみた石本の手書き

19) 前掲大島青松園入園者自治会編『閉ざされた島の昭和史』の「年表 自治会・青松園関係」には自治会葬は三宅への1回だけしか記載されていない。

20) 林は1943年12月10日付医官採用で1947年7月18日退職(『国立療養所大島青松園五十年誌』国立療養所大島青松園、1960年)。

原稿とは一致しない。まずは、石本による文章のすべてをここに転載しよう²¹⁾。

追悼感話 / 石本俊市

長田さんは、吾が大島療養所開所の年、即ち明治四十二年五月二十日に、年齒僅か十八歳にて入所せられたのであるから、吾が大島青松園と共に生き、共に歩みし最古参りにして、彼の生涯は大島の歴史であり、活字引であった。

長田さんは入所当時、熱心なる真言宗の信者にて朝夕大島新四国を順拝し、病氣平癒の熱願をかけ再起を期したといふことである。当時はキリスト教に対する迫害が激しく、彼も血気にまかせてキリスト教撲滅に一役買って出て、何かキリスト教の欠点を探し出さんものと聖書研究にかかり、聖書は読んでゆくうちにヨハネ伝第九章に至り、かの生れながらの盲人につき弟子たちが“この人の盲目にて生れしは誰の罪によるぞ、己のか、親のか”と問ねたるに対し、イエスは“この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顕れん為なり”と答へ給ふたところに読み至り豁然として靈眼が開かれ、遂にサウロの如く“何ぞ我を迫害するか、汝荊ある鞭を蹴るは難し”と、全く主の捕虜となり、昭和三年十月十二日受洗の光栄に与り、同年十一月十一日には、故三宅官之治大兄達と僅か四、五名にて靈交会を創立せられたのであるから靈交会創立者の中の唯一人の生存者でもあった。斯くて聖言の如く“土の器に貴きものを盛り給ふて、彼によりて神の御業はあきらかに顕れた”のである。それより熱心に聖書の研究に励み、勉強して全く独学で今日の如く大成し、大島の長田さんだけでなく、長田さんといへば、全国癩者の代表者みたやうに広く知られ、畏くも大宮御所にまで知られたのである。

私は長田さんに二十六年間も親しく訓育された者であるが、山は遠くより眺めて綺麗であって、中に這入って見れば、その真の姿がわからないやうに、私は余りに近すぎ、親し過ぎて却って長田さんといふものの真価を本当に知らなかった面のあることを今にしてつくづくと思ふ。

長田さんは服装や食事その他日常のことに關しては無頓着であった。私は余りに細心で神経質過ぎる程に物事が苦になり、一点一画もおろそかに為し得ず凡て徹底的にやらねば気の済まぬ性分であるに反し、長田さんは凡てが大まかでこせこせした所がなく、何でも人に一度“頼む”と

²¹⁾この史料の転載にあたり文字入力について滋賀大学経済経営研究所の研究サポートを得た。

いって委せた以上その人を信頼して干渉がましいことは絶対に言はれなかった。それだけに放任主義のやうで物足りなく思ふこともあったが、之も大人物なるが故であつたらう？。

算盤と政治が大嫌のだと自ら言つてみた長田さんを、あの不自由な身体の長田さんを昭和十八年度に無理矢理に総代に引張り出して苦勞をかけたことは洵に相済まぬことであつたと思ふ。

長田さんはよく冗談を言はれた。又誤字をよく書かれるので“靈交”誌発行当時は印刷に廻すまでに私が見て気付いた誤字は訂正することにして居った（私も甚だ怪しい）が、それも恥とも思はず後輩の私に快く任せてくれてみた。又抽象的をチユウゾウテキとか、黎明をリヨウメイとか、ザツクバランをザツクラバン、ジレンマをジレウマ等々よく間違つたことを言つて居られたが、之は独学の悲しさもあらうが、余り物事にこだわらない彼の特質をよく現してゐると思ふ。それらを言ふと何時も笑つてすまされた愛すべき好漢長田さんであつた。誤字を注意すると“それでもわからうが”とか“それは俺の新仮名遣法だ”とか言つて別にそれで気を悪くするのではなく例の大きな声で笑つて居られた。然し死後遺品の片付けをしてゐると“日本語法便覧”とか“仮名遣法”といふやうなものが出て来て、あんなに何気なく笑つて居られたやうではあるけれども、蔭に於ては人知れず一生懸命に勉強をして居られたのかと思つて相済まなく思つたことである。

又“長田はオサダと呼ぶのが本当だけれども入所当時から皆がナガタナガタと言ふからそれを一々正するのが面倒だからそんなりナガタになつてしまつたのだ”と話されたことがある。之によつてみても物事に拘泥せぬ大ざっぱな不干涉主義の大まかな交際し易い愛すべき“人間長田”さんの真面目躍如たるものがある。

長田さんは自分が十八歳で入所し、自暴自棄に荒んだ人々の中で苦勞をせられたので、その経験から子供等を非常に可愛がられ、貧しい自分の財布の底を叩いてまで病童の為に尽され、日曜学校も拾数年続けられた。然し彼の真意を解せぬ者どもは彼是と言ふた。そんな中にも長田さんは“自分が日曜学校をやってゐると、子供等をキリスト教に引張り込まうとしてやってゐるやうに思ふ者もあるが、私は決してそんなちっぽけな偏狭な考えからやってゐるのではない。自分が苦しく辛かつたことを思ふと、病気の為とはいへ親や兄弟の温い懐から離れて淋しくしてゐる彼等を見るとき放つてはおけない、誰かが温い心で抱いてやり、よき友達となつて宗教的情操

を養い、善き子供に、善良なる病者に、善き日本国民になるやうに指導してやらねばならぬ”と
言って日曜日には鞆をかけて子供等の先頭に立って山上の礼拝堂に登られ、又一週間に一晚か二
晩は必ず少年舎に行って、科学探偵講談といふやうな面白い話をして子供等を喜ばし慰めて居ら
れた。

長田さんは水泳も達者、碁や将碁も大島の横綱格であり、俳句の方は“三楽園穂波”といって
宗匠の資格を有し、短歌も詠まれた。詩人であり、信仰の人であり、祈の人であったことは私が
申上げるまでもなく皆さんのよく御存知の通りである。

長田さんは多くの著書を世に出された。

詩集 霊魂は羽ばたく 昭和三年五月出版

癩者物語 みそらの花 昭和三年六月出版

詩集 霊火は燃ゆる 昭和五年十月出版

詩集 祈りの泉 昭和六年三月出版

自伝 小さき者 昭和六年十月出版

随筆集 光れ輝け 昭和六年十一月出版

癩園物語 回春の太陽 昭和八年九月出版

詩集 雲なき空 昭和十年七月出版

修養談 碎けて結べ 昭和十年七月出版

詩集（英訳） 燃ゆる心 昭和十三年六月出版

随筆集 穂波実相 昭和十三年九月出版

トラクト 神は活く 昭和十四年十月出版

闘病談 病床その日その日 昭和十六年十二月出版

聖書研究 創世よりの瞑想 昭和十八年二月出版

尚この外に原稿盗難通知二原稿、紛失せし原稿もあり、現に出版準備中のもの二冊、トラクト
二頁版のもの四十五種あり。と彼の著書目録の終りに記入してある。

右の如く既に出版せしものだけでも十四種類に達し、しかも霊魂は羽ばたくは九版、みそらの
花は二版、霊火は燃ゆるは二版、光れ輝けは二十版、回春の太陽は二版をそれぞれ世に出してあ

る。そして世の人々は長田さんを“島の聖者”の如くに尊敬愛慕して下さった。然し彼自身は聖者の如く遇せらるることを甚だ心苦しく迷惑に感じられ“自分はそんな聖い者でも偉い者でもない。買のかぶられてゐる。本当に卑しく貧しい人間である。ただ貴きはキリストであり、誇るべきは主イエスである。私は多くの著書を出したことや、世の多くの人々に知られたことなど少しも名誉とも成功とも思はない。著書を公にしたことは唯自分の救はれた歓喜の証言に過ぎないのである。人全世界を贏くとも己が生命を失はば何の益あらんや、で私の眞の成功はキリストを信じさせて頂いたことである。”とよく語って居られたが、何が達者、何が上手、何が成功といつても、彼にはキリストを信じたことが唯一の成功であり、富であったのである。

昭和十九年十一月九日に靈交会創立三十周年記念会と、長田さんの受洗三十周年記念のため、祝賀感謝礼拝を行ふた席上、長田さんは“第一も神、第二も神、第三も又神、これが穂波の凡てであります。若し私に何か＝善き事が行はれますならば＝穂波を見るよりも、さう為さしめ給ふ神を見て下さい。若し私にほめることがあれば、さう為さしめ給ふ神を頌めて下さい。活かされし者よりも、それを活かし給ふ神を仰いで居るべきであります”と感謝の証言をなし、凡ての栄光を神に歸せられたのである。彼は神の御前には全く謙遜であった。

又或る集会では“福音の証音を初めまして私の名が雑誌等に見え出しましたことにより肉親縁者よりハガキ一枚も来なくなりました。皆逃げかくれ、母親さへ隠れて生死の程もわかりません。主は凡てを取去り給ふて、御自身のみ私に残し給ひました”と語られた。“母も生きて居ればもう九十幾歳になる筈だ”と淋しく話されたこともある。この点に於て長田さんは孤独であった。こんな苦い淋しい体験から長田さんは“決して人に頼るな、本当に頼るべき者を頼り、信ずべきものを信ぜよ”と何時も卓を叩いて諄々と諭して下さった。又“私は常に神に在りて清き大きな野心を抱いてゐる”ともよく語って居られた。

長田さんは右顧左盼することなく、全熱情を神に傾け、凡ての物を神に献げつくし、地上に於ける最も善き働きを了へて遂に召されたのである。噫、信仰の勇士は仆れたり！。

岡山市の田中文男先生よりの悔み状の中に“あの身体で今日までの生命が奇蹟とも我々には考へられる位であります”と書いてありましたが、全く彼の存在は奇蹟であった。彼によって神の御業は大いに顕れたのである。

長田さんは右足切断のときから三十四年目に始めて重病室に這入り、僅か三日間の患ひで、背中を撫でてみた附添人にさへわからぬほど静かに静かに召されたのである。信仰の人長田さんに応はしい大往生であった。

長田さんの備忘録の表紙裏には“原籍地 徳島県板野郡堀江村、本籍地 広島県呉市堺川通り、現住地 香川県木田郡庵治村六〇三四ノ一、永住地 わが国籍は天に在り、之は神の御約束によりて確實なり。昭和十八年五月八日記”とある。実に彼は寝た間も忘れ得なかつた憧れの国、乳と蜜との流るる永住地、天国に遷されたのである。之は彼の為に祝福すべきことであり、万歳を唱ふべきである。

又長田さんが常に愛読して居られた旧新約聖書の民数紀略第八章十八節の所に“自分は大島で生れたキリスト者として首出子^{うひこ}なれば神の所有に属する者なりと確く思ふ”と朱書してある。之によりても神に属する者なりとの熱い確信のほどを覗ひ知ることが出来る。

長田さんは大変遠慮深い方で、人様に御迷惑をかけぬやう常に注意をして居られた。遺言書の中に“葬式は簡単に、得べくば夜伽室より火葬場へ運んで貰ひ度いと思ふ。記念会など為さぬやうに”と書いてあった。人様に御迷惑をかけることを極度に嫌はれた長田さんであったから、この寒い中に私が長い話をして皆様に御迷惑をおかけすることは故人の遺志ではありませんから、私の話はこれで終わります。/(葬式の席上に於て為したる追悼感話に加筆したものである)

ここで石本の「追悼感話」の記述をめぐる2点についてふれておこう。1つは、霊交会の創立年を訂正する書き込み、もう1つは、穂波の著作目録について。石本の「追悼感話」には、穂波の受洗と霊交会の創立について、

〔穂波は〕昭和三年十月十二日受洗の光栄に与り、同年十一月十一日には、故三宅官之治大兄達と僅か四、五名にて霊交会を創立せられたのである

と記され、「昭和」が「大正」とペンで書き直され、「昭和三年十月十二日」のところに赤鉛筆による抹消線が引かれてある。元号をまちがえた単純な誤りではある。だがこれは、のちにみる活版印刷の『穂波追悼』でも「昭和」のまま印字され、さらには、土谷の『癩院創世』(前掲)においても、霊交会の「会員規則」のところで「昭和三年十一月十一日」と記されることとなるのである。

これをめぐって、キリスト教大島霊交会による『癩院創世』の再版(1994年)がつくられるときに、当時の霊交会代表が「再版に当って」において²²⁾、「会員規則」の日付が「昭和三年十一月十一日」となっていること、その数行あとに「このようにして霊交会は創立された。三宅の絶えざる熱禱によつて生れ、神への涙ぐましい献物だつた。思えば彼がこの島へ渡つて二十年目」の記述があること、また『癩院創世』が「長田さんが書き遺した原稿を土台にして、それに肉づけしたとあることからして、本書の文言の真正を否定することはできない」と記している。三宅の来島は療養所開所の年1909年であるから²³⁾、やはり「昭和」だとみるのである。

そのうえで、すでに1964年に霊交会は創立五十周年を祝い、それを記念した『霊交会 創立五十周年記念誌』(笠居誠一ほか編集委員、大島青松園霊交会発行、1964年)を発行し、その巻頭論稿といてよい石本俊市「霊交会五十年に歩み」に、霊交会の創立は「大正三年」と記してあり、その記述を「石本さんという折目正しい几帳面な人が、確信を持って書かれた文言である」と考えるので、霊交会の創立を大正3年と確認し、創立八十周年の記念として『癩院創世』を再刊し、ただし「昭和三年」という記述はそのままとすると判断されたのだった。土谷が『癩院創世』に霊交会の創立を昭和3年のことと記したその根拠は、彼が編集を担った『青松』穂波追悼号に掲載された石本の「追悼感話」の記述にあったといえよう。それが石本自身による筆記かどうかは不明。

もう1つの穂波の著作目録について「追悼感話」は、「詩集 靈魂は羽ばたく 昭和三年五月出版」から「聖書研究 創世よりの瞑想 昭和十八年二月出版」まで14冊をあげている²⁴⁾。単純な誤記をのぞけば、この14冊はそっくり『穂波追悼』で活字印刷となるが、『癩院創世』においては「自伝 小さき者 昭和六年十月出版」が抜けたり、「癩者物語 みそらの花 昭和三年六月出版」が「療養物語 みそらの花 〃〔昭和三年〕」と書き改められたりという改変がくわわっている。ここに着目する理由は、じつは穂波が単著をどれだけ上梓し、それらがいまどこで閲覧できるのかが

²²⁾この「再版に当って」で土谷の紹介がなされ、彼は1951年に「社会復帰」して岡山、そして横浜へと居を移し、「以来、多才に任せて多方面に活躍され、土地を買い自らの持ち家を建て、二十数年後には更新築されるなど、ハンセン病回復者としては際立った働きをされた人物と言わなければならない」とその生がたどられている。土谷は1991年に歿した。

²³⁾三宅の来島が1910年だとかつて記録されていた(総代大塚一「故長老三宅官之治氏の昇天に就て」、園長野島泰治「島の聖者、智者」、ともに『藻汐草』)第12巻第4号、1943年5月、収載)。

²⁴⁾この一覧につづけて石本は「尚この外に、原稿盗難通知二原稿、紛失せし原稿もあり、現に出版準備中のもの二冊、トラクト〔宗教小冊子〕二頁版のもの四十五種あり。と彼の著書目録の終りに記入してある」と記している。ここにいう「彼の著書目録」がなにかは不明。

はっきりしていないからなのだ。2008年9月の調査で、あらためて穂波の著書が見つかったところ、そこに『小さき者』(霊光社、1931年)があり、他方で「詩集 祈りの泉 昭和六年三月出版」はなく、後者は依然として所在不明のままとなった²⁵⁾。現在、大島での療養者による刊行物のまとまった最新情報は、『閉ざされた島の昭和史』(前掲)所載の「入園者刊行図書目録」で、そこに穂波の著作は遺稿集をふくめた15冊があがっている。『小さき者』もある。そうするとこの目録は、『瀨院創世』ではなく、『穂波追悼』か『青松』第17号を参照してつくられたこととなる(著書それ自体をみた可能性はとても低い。現在大島には穂波の著作がそろっていないのだから)。瑣末ともみえるこうした情報の受け伝えをたどることは、大島での歴史の作られ方を考えることにつながるのみとおしがある。

『青松』穂波追悼号にもどろう。『青松』第17号の目次には、「弔辞(協和会葬に於ける)」「弔辞(霊交会より)」と2つの弔辞が掲載され(「弔辞」として載っているのはこの2つのみ)当該頁には、「総代 石本俊市/代理 今井比沙志」の名で「弔辞」が、「大島キリスト教霊交会 林友吉」の名で「弔詞」がある。石本は12月19日にとりおこなわれた葬儀に出席しなかったのだろうか。その弔辞をつぎにあげよう²⁶⁾。

弔辞

維時昭和二十年十二月十八日午前二時、何事ぞ一夜の雨をあだにしてその魂の結びもあへず忽焉として遠く世を隔てぬ。行年五十五。命を仮せる歩に於て幾何ぞや。人の齡の限りなれば歩して澎湃に等しかるべからざらんもせめては生ける常ならんにはありし世のそれに加へてさらに又島の発展にはただ救瀨の旗旗の下に貢献する処窮りまからんを。

神を信じ神と共に生き、詩魂もなく、文藻ゆたかにして泉の如く、常に吾らの幸福を祈念して愛と正義の為には喧々諤々の議論も敢へて厭はず、熱血の詩情は一管の筆をかりて天馬空をゆく如く、世に問へる著書亦数ふるに違あらず。けふも尚机上を飾りて温容は前に映ず。しかも幽明すでに境を異にして永久の別れに立てる。哀悼の情極りて殆ど言ふ可きを知らず。この恨いつの

²⁵⁾ 前掲阿部「長田穂波日記1936年」(3)を参照。

²⁶⁾ この史料の転載にあたり文字入力について滋賀大学経済経営研究所の研究サポートを得た。

世にか尽くべき乎。

氏は明治四十二年十八才にして故郷徳島県をあとにして入所、以来星霜こゝに三十有七年、吾療養所開所以来の長老たり。その間先駆者としてキリスト教霊交会により同病相愛、神の教へを説きん倦むを知らず島の向上発展に尽瘁せる亦絶大と言はん乎。吾らの今日あるは氏の功績に負ふ処頗る多し。即ち昭和六年三月より十有二年の永きに互り評議員会副議長。昭和十八年三月より一ヶ年総代。十九年四月より評議員として今日に至る。顕要の職に挙げられ病軀に鞭打ちつゝ尚氏は社会的に文書伝道を行ひ、血族の解放を叫び、文章に詩に歌に往くとして佳ならざるなき筆陣を張りて譲らず今や長田の名声は同信の間はもとより斯界に燦と輝く。

氏は博学にして多才、温厚にして高潔、事に処しては判断をあやまらず、創意と工夫に富み、恬談にしておごらず衆人の齊しく敬服する処にして常に師表と仰がれたり。

十二月十六日心嚢炎にて突如香川寮に入院さる。以来、園長殿を始め医務当局の心からなる看護を辱ふすと謂へども天寿如何ともなし得ず遂に逝く。哀悼の情たとふるに術なし。こゝに病友相寄り相集り氏の生前の功に報いるに協和会葬の礼を以て送るに際し一言蕪辞をつらねて弔辞に代へる。/昭和二十年十二月十九日/総代 石本俊市/代理 今井比沙志

さきの「経過報告」によると、穂波を語る座談会は2回、1945年12月23日と翌1946年1月18日におこなわれた。前者は『青松』穂波追悼号に掲載されているが、後者はみえない。霊交会主催でおこなわれたという座談会については、そのはっきりとした記録がいまのところみつからない。まず前者について、ここに全文を転載しよう²⁷⁾。

故長田大人を語る座談会 / 於会議室、昭和二十年十二月二十三日十三時より / 司会 三木康平(庶務部主任) / 出席者 林先生(医官) / 高橋先生() / " 石本俊市(総代) / " 熊野源一(評議員会議長) / " 河淵朝馬(昵懇者) / " 松田美津夫() / " 岸野ゆき() / " 青松同人 / 筆記 土谷勉

三木 林先生、高橋先生始め皆さんどうも御苦労さんでした。開会に先立ち亡くなられました長田大兄の御冥福を祈る為しばらく黙禱をお願い致します。

²⁷⁾ この史料の転載にあたり文字入力について滋賀大学経済経営研究所の研究サポートを得た。

黙禱

三木 偉大なる長田さんを今回突然失ひましたことは、単に霊交会ばかりでなく、青松園にとつて非常に大きな損失でございます、この大きな穴を埋合はず為にも、これから皆さんにウンと頑張つていたゞきたいのであります。実はこの座談会も上の祈堂で催すつもりでありましたが、林先生から抗議を申込まれまして、こんなむさ苦しい処になりましたが、固苦しい処は抜きにして何卒ザツクバラに語つていたゞきたいのであります。先づ話の緒口といふ訳でもありませんが、林先生何か・・・。

林 けふの座談会はどう言ふ意味の 。 /たとへば「青松」に記事を載せて永久に保存する為とか。或は長田大兄を色々の方面から語合つて対外的にも知つて貰ふ為とか。

三木 けふ此処にお招きしたのは主に「青松」の同人と詰所の者、尚、故人と生前親しくしてゐた者、まあそんな範囲でありまして、長田さんをいろいろと語つていたゞきまして記念にもしておきたいし、故人が生前親しくしていたゞいた、たとへば岡山の田中先生始め、他の方々にも実は「青松」の別冊を作つてお送りしたいのであります。

林 実は先日も故大塚さんの追悼号を読んで感心してゐるのです。場合によつてはつまらぬことを言つた事などあるかも知れないが、聖書のやうな長田さんでも一緒に住んでをれば部屋の者などには又違つた意味の面白いことがあつたらうね。 /けふも内らで「青松」に載す長田さんの座談会があるさうで園長さんにも来ていたゞかうかと言つてみたが、却つてそれでは固苦しくなるから遠慮した方がいゝだらうと僕言つておいた。兎に角、長田さんが日頃どんな風に生活してゐたかなどゞいふことを聞かして貰つたらいいのではないかね。又、戦争中などはどんなであつたかと言ふことなど・・・。

(一) 物事に頓着せぬ長田さん

石本 長田さんはよく片事を言ふ人としてザツクバラなどゞも平気で言つたが、兎に角皆遠慮なく話していたゞきたい。

三木 前に園内で「報知大島」といふ機関紙を発行してゐた頃のことなんですが、長田さんがその編輯をやり、私が騰写の方を受持つてゐたのです。原紙を切つてみて「長いから載らぬ」と言ふと、「エ、加減の処で切つて呉れ」と言ふ様な始末なんです。出来上つて持つて行くと、「有

難う」と言ひ乍ら、読みもしないでそのまゝ背後にやつて終るので「読みはせんのか」言ふと、
「自分の読むよ」と言うんです。たよりないことつたら……でも一度だけこぼした事
があるんです。ちょうどその時分、今の少年室の間を借りて編輯してゐたのですが、紙上暑中
見舞を出したことがあつたんです。その時、手近なものだから「少年室の暑中見舞」は出したん
ですが、共楽団（芝居の団体）のを出さなかつたんです。すると団長だつた石本さんから「少年
室を載せて共楽団を載せぬといふ法があるか」と、まあ大変な抗議を申込まれたのです。その時
は長田さんも「石本さんに叱られた」と言つてしよげたものです。それからこれはものはづけの
話なんですが、死んだ芥昇君（その頃少年室教師）が気にかゝるものは「人の誤字」といふのを
何日か出したんです。ところが、その時の選者が誰よりも一番誤字を気にせぬ長田さんときたの
です。その事を芥君が知つてとても悔んだことがあります。やはり入選しなかつたのですが
。「選者が別人だつたら出ずにはをらぬ句だが」と、繰返し繰返し言つてね。

松田　ほんとに呑気な人だつたからね。

石本　人の死んだ命日なども皆目覚えてゐないのです。宮内先生の御命日なんかも私が言つて
始めて「さうか、さうか」と思出すやうな始末なんですからね。

松田　人間は瓢箪のやうでなければいかん。しかし緊めくゝりがないといかんなんて言つて……。

岸野　あの人は身につける物などほんとにかまはぬ方で、いつもよれよれの着物を着てゐまし
た。近頃は脛や尻の破れたのを平気で着てをりました。女ですから私も余り見兼ねて「脱ぎなさい」
言ふと、それでも仲々脱がうとしないのです。仕方がないから代りの着物を提げて行つて頼
むやうに言つてやつと脱がしたことが度々あります。何日だつたかデンチコ（袖無羽織）を持っ
て行くとね、「こんなのを着るのは生れて始めてだ」と言つてとても喜んで着て呉れたことがあり
ます。石本さんなんかよく知つてをられるやうに、身装なんかほんとにかまはぬ人なので破れた
物でも平気で着てゐました。それから亡くなつた高本さん（霊交会員）のことについては「あれ
は古い友達だから困る時には何でも遠慮なく言つて呉れ」といひ、一度無理を願つたことがあ
るのです。その高本さんが息を引取つた時、不自由な身体だし傍に来て貰ふのは気の毒に思つたの
ですが、「知らして呉れなかつた」と言つて怒つたことが一度あります。滅多に怒る人ではなかつ
たのですけれど。

石本 高本さんといふのは小豆島から来てゐたのです。ほんとに色々長田さんの世話になつたのです。

半田 服装の点など三宅(官之治)さんとは正反対だつた。三宅さんは集合の際などはチヤンといつも着更へて来られたが、長田さんはそのまゝだつた。

上野 いつかは部屋で猿又にきんぐしをつけるとか言つて、あの不自由な手に針を持つて一日中縫つたことがありました。

石本 あの人は政治と算盤が一番好かぬといふ位でしてね。制裁などの場合はいつも寛大の方でした。当局に対しても何方かといへば強硬な事は言はなかつた。そして「人に頼るな、腹の人になれ」と、教会などでも口癖のやうに言ひ、私なども度々きかされました。「どんな偉い人でも人間には制限があるのだから頼るな」と言ふのです。身装をかまはぬことは有名で、三宅(官之治)さんの葬式の時などは帰つてからあんまりの身装をしてゐたので部屋の者に叱られたとか。

林 香川寮に入院した時なども髭が伸びてゐてね、「診療に行かうか、散髪に行かうかと思つてゐたら到頭診察が先になつた」と言つて笑つてゐたと、林女医が言つてゐた。

浅野 「青松」の原稿を頼みに行つても長田さんはいつも返事がよかつたですね。気持がよかつた。しかし僕は長田さんが総代をしてゐる時、一度喧嘩をしたことがあるんです。あの人の字は特徴のある字でしたが、あの特徴のある字が、これから見られなくなるかと思ふと本当に淋しい。

林 何で喧嘩した。

浅野 食料が減つて部屋の者が喧しく言ふもんだから室長の私が談判に行つたやうな訳なんです。

林 浅野君の喧嘩相手は誰もだらう。土谷君などとも・・・。

浅野 長田さんは始めの間はボヤケテゐるやうでも後になると熱が出た。先日の「青松座談会」では吾々若い者が大いに気合を入れられました。長田さんは亡くなつたが、吾々は長田さんの遺志を継いでこれからは大いにやらねばならぬと思つてをります。

(二) 勤勉な長田さん

林 お葬式の日石本兄の感話にもあつたが、誤字を書いても「判ればいゝ」と故人が言つたことなど、如何にも長田さんらしいと思ふね。然し、先日も遺書を石本兄と二人で調べてみたら「仮名遣便覧」といふ本が出てきた。自分の誤字を石本兄にあのやうに平気で言つても、蔭では「仮名遣便覧」などを読んでコツコツ勉強してゐたのですね。ほんとに勤勉家だつた。先日も僕祈堂で言つたのだが、長田作曲の珍しい讚美歌を聞かして貰つたのだよ。日本の音楽やら支那のやらさつぱりわからぬ処が面白いね。驚いちやつたよ。でも本人は至極真面目にあのお玉杓子のやうな手で一生懸命お玉杓子を書いてゐたのだよ。遺書を調べてみた時もそんなのが沢山出た。それから遺書を調べてみたら「聖書辞典」といふとても大きな本が出てね。(と、両手で形を示し乍ら)それを二回も繰返して読んだといふのですよ。

石本 実にあの「聖書辞典」を計って見たら一貫三百匁ありました。

林 あれは自分で買つたのかね。

石本 ハイ

松田 全部自分で買つてゐたのです。

石本 他人が見たら道楽かと思ふ位沢山買ひましたね。児童らに話もしてゐたので「種切だ、種切だ」とこぼし乍ら次々と買つてゐました。それと、あの人は最後まで冷水摩擦をしました。

松田 近頃は健康が衰へてゐたので時には休むこともありましたが、冷水摩擦は朝晩きまつてしてゐました。

林 疥癬にはならなかつたのか。

石本 ハイ

林 あの様な身体になつても冷水摩擦を最後まで続けたといふことは、吾々にとつてもよい教訓ですね。

石本 どちらかと言へば理想家として、よくまぼろしといふ事を言ひ、僕は小いまぼろしでなく大きいまぼろしを持つてゐるなど・・・

林 始めから共同生活をしてゐたのかね。著書など読むと穴の中で勉強したなど言ふのがあがるが・・・。

岸野 今の作業場の上の穴の中で勉強してゐたのです。御飯食べると通つて・・・。

石本 よく山などにも行つて

林 ではズツと共同生活なんだね。

石本 八一。

林 特定室は始めから

石本、岸野 いや。途中からなんです。

林 上野さんは同室なんだが、部屋ではいつも朝など一緒に起きて。

上野 朝は皆より早かつたです。

林 夜は

上野 晩は早いのです。たいてい五時か六時にはもう休んだ。

林 集会でもなければいつも読書などしてゐたの・・・。

上野 八一。いつも本を読むか、読んで^{アンダーライン}筋を引くか、そして十日位読んでゐたかと思ふと、今度は思ひ出したやうに原稿をひろげて書き始めるのです。

石本 長田さんはよく^{アンダーライン}筋を引きました。私などあれを好かぬのですが。

笠居 私は長田さんから集合の度に感話をきかされてゐるんですが、古い割合にケ人的交際はしてをらぬのです。私が入所した当時長田さんはいつも三十八号室（その頃長田さんの居つた部屋、長田さんはまだこの頃普通室にをつた、筆者註）の窓のところで本を読んでゐた。それから三十五号の横で聖書研究をしてゐた。私はそれを見て始めてあれが長田さんだと知つたのです。身の廻りに頓着せぬことは先に皆さんが話されたが、それと最一つは人に干渉せぬこと。その二ツはあの人の特徴だつたやうに思ひます。実はその頃私の部屋に佐藤藤歌といふ人がゐたのです。その人に私は発句の手ほどきを受けたのですが、その頃私の句が高松に出して天位になつたことがあるのです。ちょうど長田さんの句も徳島の新聞に応募して三十円賞金を貰つたことがあるんです。長田さんを人は天才のやうに言ふかも知れんが、十八の時入所して三十幾年間一生懸命に勉強したお蔭であつて、吾々は誰でもすぐ先生になりたがるものだが、長田さんの血の滲むやうな努力こそ大いに学ぶべきだと思ふ。

半田 私のは長田さんに対する第一印象なんですが、私は草津の和田先生によつて救はれ、長田さん宛の手紙を持つて大島にやつてきたのです。途中で彼の色の黒い大島丸の前の船長さんに

とても烈しく叱られ困つてゐたのですが、運よく小林所長さんが「此方に来い、来い」と言ふ風で直ぐ入所さしていたゞきました。長田さんは大変私を見て喜んで下さいましてね。それがまあ、私の長田さんに会つた始めなんです、長田さんの耳の大きいと言ふこと。耳の大きい人は偉いと聞いてゐたので先づ印象づけられましたね。

(三) 趣味の長田さん

石本 　　いつか幼灯機を買つたことがあつたね。

岸野 　　俳句で貰つた金でいつだつたか買つたことがあるのです。

林 　　次の斉木さんは何か

斉木 　　長田さんは大変協和的であつたといふことです。一頃、大塚さんが議長で長田さんが副議長、私もその末席を汚してゐた訳なんです、常置委員会などでも大塚さんはよく怒りましたが、長田さんは決して怒らなかつた。それはまあ兎も角として趣味が広いとでも言ふのでせうか、慰問などにも恐らく行かないことはなかつたらうと思ひます。野球なんかにも定つて来てゐた。批評まで書いたのですから関心が深かつたのでせう。あの人はいつまでも老いを知らない万年青年といふ気持ではなかつたのでせうか。出来るだけ広く智識を得たかつたのかも知れませんが。

松田 　　私など長田さんのお蔭で文芸を始めたやうなものなんです、いつかも一枚の雲の写真を出して「この雲の高さがわかるか」と問ふのです。そして「この雲が　米、この雲が　米」といふ具合に一ツツ説明し、ちよつとした事柄であつても注意して観ねばいかん。詩でも作らうと言ふ者は特に。と、おつさんはこの点無頓着な様でも日頃小い物まで注意してゐた。

小見山 　　私とは部屋が前うしろになつてゐたので朝の挨拶はいつも両方が窓から顔をつき出して「お早よう」といふ印に手を振合つたものです。私も口が悪いが、長田さんも悪い方でしてね。それから又あの人は盆栽が好きだつた。「あれはつまらん、これは枯れる」なつて僕が行つて一鉢々々くさすもんですから、長田さんは私の顔を見ると「それ又来た、お前らに見せてもわからん」と言つて応酬する。「そんなんだつたら金庫の中にも蔵つて誰にも見せないやうにしたら如何だ」など、いつも冗談口をきいたものです。最近は肥料がすっかり無くなつてね。ある時は何処からか大豆を三合ばかり手に入れて、それを石の上で小い槌で一ツツ潰してゐるんです。「やるぢやないか」余りこまめなので感心してさう言ふと、「作らと思へば骨が折れるよ」と長田さん

も笑ひ乍ら沁々さう言つた。

林 盆栽は自分で買ふてみたのかね。

三木 多分誰かに貰ふたのでせう。大切にしてみた観音竹を「吾々が「熊笹だ」といふものだから機嫌が悪かつた。

石本 あれで水泳がとても巧者だつた。吉野川で鍊へたといふのが自慢でね。何でも一度溺れかけて助けて貰つたことがあるさうです。前頃はお祈りが済むと、私と山本さん（故人で霊交会員）と長田さんと三人でいつも海に飛込んでみたものです。私も一度もうこれは駄目だと思ひ「助けて呉れ」と大声で悲鳴を上げたことがあります。泳ぎつくことは泳ぎ着いたですが。

上野 この間、当局から雨傘をもらつてね。長田さんに号室を書いて貰つたのですが、頭倒あれが最後になりました。「長田さん巧いぢやないか」など、傍から冗談を言ふと、「前はもつとうまかつたのぢやが」など、笑ひ乍ら三十分もかゝつてやつと書上げたのです。

小見山 いつも大声で部屋の者に新聞などを読んでかかしてゐましたね。あの特徴のあるアクセントで。隣り部屋の私などにまできゝとれるくらい大声で。

石本 声はだいたい大きかつたね。

上野 この間こんなことがありました。スフのメリヤツシヤツの袖口をひろげ乍ら、とても伸びて二人位這入るやうになつてゐたのですが、「御恵みの日」の「ものはづけ」募集に「広いものは」「スフの袖口」といふのを出したさうです。ところが、林先生が選をされて出なかつたのです。その事を長田さんが面白可笑しく話して部屋中を笑はせました。

三木 「ものはづけ」にはきまつて出してゐたやうだね。

上野 俺の「ものはづけ」は一度だつて出たことがないと言ひ乍らも。

石本 ひと頃は天文学を研究するんだと言つて望遠鏡まで買つてね。それから碁も将棋も強かつた。まあ此処では横綱格だつたでせうね。ほんとにあの人には表と裏のないつた。子供らに対してもその事を説いて訓へてゐた。

浅野 子供にとつても長田さんの死は大損害です。日曜学校に行つて話をきくことも楽しい一つだつたんですからね。子供の今後に影響する処も大きいでせう。

石本 その点少年室のお父さんも心配され、先日も「誰か代りにやつて呉れんかなあ」と言つ

てみた。

斉木 長田さんは探偵物が好きで・・・。

赤沢 子供は大抵探偵物が好きだから。

笠居 傍で聞くと馬鹿らしいやうなことの辻褃を合して。

赤沢 しかし、探偵物の話は巧かった。傍できくと笠居さん同様阿呆らしいやうなものをね。

三木 高橋先生何か。

高橋 いや別に何も、たゞ斯うして皆さんのお話をきかしていたゞきたいのです。

(四) 指導者長田さん

上野 さうさう戦争中防空壕に這入った時のことなんです。電灯もなく生憎真暗だったのですが、「僕は足が不自由だから一足先に這入ってる」と言つて出て行つたのですが、その後で誰も待避する者がなかつたのです。その折帰つて来てから「吾々は何日死んでも別に生命は惜しいと思はぬが、やはり待避すべき時には待避せねばいかん。生命はあくまで大切にすべきだから」としみじみ教へたことがあります。

岸野 その事はいつか教会でも話されたことがありましたね、石本さん。

赤沢 聖書の講義は度々きいてをりますがそれより、先に総代をされてみた時、私も庶務部をして居りましたので、その際の印象が一番深い訳なんです。私はまだ年も若いものですから色々失敗も多かつたのですが、長田さんが何事によらず寛大であつたといふこと。浅野君が先に喧嘩をしたと言つたがその時の事なんです。食料が一度に減少したものだから一般が何も知らずにワイワイ騒ぐ。詳しく事情を報告しさえすれば納得するんですが、長田さんはどんなに奨めてもそれを為さないのです。「僕は皆に推されて総代になつたんだから。皆は僕のする事を信用して呉れてゐる筈だ。当局と交渉の経緯だつて傍々僕が報告して諒解を求める必要はない」と斯う言ふんです。たとへ理屈はさうであらうと、話してやれば得心するんだからと、どんなに言つてもラジオの前に起たんのです。そんなことがありました。そして暇さへあれば五線紙を出して書いたり歌つたり、実の処を言へば何処から何処までが本当だつたのか、私には判らなかつたですね。長田さんは人を信ずること、人の落度に寛大であること、そして人の仕事が済んでからでない自分は休まなかつたこと。これだけは絶対的と言つてよいと思ふ。

林 赤沢君は「青松」には何も書かぬのか。

赤沢 いや、いつも短歌を出してをります。この間うちは身体の具合が悪くて考へが纏りませんので・・・。

綾井 あの人を総代に推したといふ事は一般の大きな責任だと思ふ。

林 土谷君はどうかね。座長の三木さんは後廻しにして

土谷 長田さんに対しては私責任を痛感してをります。「長田さんが毎月書いて呉れるなら」と言ふことで、この「青松」は創めたのですからね。入院直前の最後になつた原稿（新日本建設と青松園）など、あの健康で無理だつたと思ふと済まん気持で一杯です。しかし、問題の審議などに際しては、こゝに居られる議長の熊野さんなんか御承知かと思ひますが、長田さんは少々たより無かつたですね。大体が理想家肌の人ですから、向岸に渡るといふ目的は判然してあても、それを如何して渡るかといふ具体的な事になると不得手だつたやうでした。従つて審議の際なども右と言へば右、左と言へば左

林 やはり穂波だな。

石本 今まで話に出なかつたが、長田さんが修養団大島支部の幹事長として、機関紙「つばさ」を毎月一人で書いてみたことも忘れられません。

三木 実際、あれは長田さん一人でやつてみたのですからね。

林 次は熊野さんでしたね。この間の大塚さんの追悼号の文章は大変よかつた。もつと青年かと思つてみたのですが

熊野 いやもう年寄で 。長田さんも私も双方特定室にをり、足が不自由な関係で往き来も杜絶え勝になり特別といふ交際はなかつたのですが、あの人の大きかつたケ所は学ぶべきだと思つてをります。けふも霊交会の方で祈念祭があると石本さんの放送で知り、参りたいと思ひましたが、故の遺言の由もありまして遠慮しました。しかしかのやうな座談会に招聘されまして実に光栄と思つてをります。お芋をいたゞき乍らも長田さんのなつかしい声や面影を目のあたり見るやうです。この前の「青松」に「神風は吹く」といふ一文を書いてをられました。あの一文には大変感銘を受けました。長田さんの処に一度行つて色々話合ひたいと思つてみた矢先、突然逝かれて終ひまして、上野さんまで伝言してあつたのですが残念なことをしました。兎に角腹は大

きく持たねばならぬといふことをあの人には深く訓へられました。

石本 熊野さんとは私的と言ふより公的關係といふ方で。

泉 私の入所当時なんです、雨の日に私が長田さんとも知らず傘で部屋まで一度送つて行つたことがあるのです。後でその事をととても喜んでみた部屋の者からきゝました。それ位は私は先づ。

林 郵便物はとても沢山来たらうね。

笠居 私も郵便配達をしたことがあるが、あの人来ぬ日は無かつた。

松田 私はたいてい朝御飯までに行つてみたが、その時三通や五通はキツたのまれた。

上野 何の原稿か知らんが、東京の戦災で丸焼になつたと言つてましたが。

小見山 著書はこゝの人に大抵読まれてゐるか知ら。

石本 さう読まれてゐないだらうね。

林 「藻汐草」や「青松」の原稿を全部まとめて上梓したら。

石本 「藻汐草」はとにかく「青松」は失ひ易いから確固と保存しておいて欲しいね。

浅野 文章を見ても長田さんは詩人だといふことが判るね。

土谷 章と章との飛躍が烈しい

石本 やはりあの人は喋る方が上手だつた。

笠居 いつか高知県の方から話に来て呉れと言ふて来たとか。

石本 そりや、前の小林所長さんがとても称めて、一度高松に連れて行つて話さし度いと言はれた位で。

林 話は本当に巧かつた。

石本 特に近頃はうまかつた。

林 外に出してもあれだけ話の巧い牧師はちよつと見当らないね。

綾井 私は永い間お世話になつてゐるのですが、私的に交際するやうなことは少かつたのです。

しかし、長田さんの原稿はいつも楽しみにして居りました。宗教的とでも言ひますか引きつけられるものがありました。いつか一度教へを乞ひたいと思ひ乍ら、到頭その機会を失つて終ひました。あの人は人に強い事なく極く自然に指導してゆかれまして。いつかの協力会の時でした。

さうさう補導部にをられた奥村さんが辞任されるやうになつた時のことです。竹内さん（現在退所して不在）の質問に対しても昂奮され、長田さんの強い責任感といふものを沁々考へさせられたことがあります。郵便物を配達して行きまして、「有難う、御苦労」と定つて言はれた。配達するのが此方の仕事であつても、わざわざ窓を開けて礼を言はれるのには此方が励まされると共に訓へられました。いつも何か書いてをられたが、それが五線紙であつたといふことを先の皆様のお話で始めて知りました。まあ、長田さんは何日見ても読むか書くかしてをられました。あれだけ不自由な身体でと思ふと、その真剣さに訓へられます。祈念会には石本さんの言葉に従ひ残念乍ら参会しませんでした。幸ひ座談会が催されたので嬉しく思つてをります。

多田 私は別にありませんが、一昨年庶務部の方をやらして頂いてをりました関係で、当局の晩など長田さんにいろいろ話を聞かしていただきました。「僕は薬のことは知らんが新薬はやつた方がいゝ」などゝ私も奨められた一人です。

林 多田君は学園を何年位やつたの。

多田 二年とちよつと

林 子供は長田さんが好きだつたらしいね。

多田 子供たちは長田さんの話を外から来て下さる慰問位に面白くきゝました。

小見山 話のある晩は子供が態々迎ひに来てみたね。

林 息を引とられた時背中を撫でゝみた人だね。河淵さんは。

河淵 私は入所して二年位して導かれて会に入つたのですが。

林 いつ入りました。

河淵 十五年に

林 昭和で

河淵 いや大正なんで（一同哄笑）。ちよつと二十年になります。長田さんはいつも聖書の研究をしてをられましたが、私も用事があつたら行く位で、いつも顔を見ると「如何か、如何か」と挨拶をなしました。長田さんは物に熱中する性でした。香川寮に入院されてからは「誰が看護に来て呉れるのかと思つたらお前が来てくれたか」と、たいへん喜ばれ「こんどは助らぬかも知れん」と、冗談のやうに言つて笑はれました。そして「お前に腕ぬきを作つて貰つて助つた」

と言ひ、その時高橋先生も知つてをられる通り、先生に「何が一番好きか」ときかれたのでありますが、耳が遠いので私が取次いだやうな始末です。亡くなられる最後までお祈りをされました。そして五分間ほど経つともういけなかつたのです。「長田さん、長田さん」と、一生懸命大声で呼んだのですが最う駄目でした。自分には長田さんがキリストをお迎へして昇天したやうな気がします。

(五) 人間長田さん

林 人間長田の印象とでも言ふものを話して見たら如何だらう。

三木 さうですね。松田さんどうだらう。

松田 僕は十年位前から看護にでも行つてをらねば兎も角、毎日きまつて行つてみたのですが、時によると本当の親のやうな気がした。「お前が穂波の第二世にならねばいかん」などゝ親身になつて激励されました。「長田さん」といふと他人のやうな気がするんですが、「おつさん」と言ふと一番私には身近に感じられるんです。

林 ここに来てからもう大分になるの。

松田 十一年。

林 故郷は何処。

松田 山口県なんです。

林 同室にをつたのは上野さんだけだね。長田さんより古い人は

石本 ちよつと居ないでせう。何分明治四十二年五月二十日、十八歳で入所したのですからね。

上野 人力車に乗つて来たとか言つてゐました。

石本 その事をよく話てね。二階の窓から一人の姉が見送つて呉れたのださうですが、声をかけることも出来なかつたと言つてね。

林 中学にも行つたといふのだから家はかなりやつてゐたらしいね。

笠居 お寺の小僧にもやられたらしいのだが。

石本 とても腕白だつたらうと思ふ。

三木 義足には何日頃なつたのかね。

岸野 明治四十五年頃ではなからうかと思ひます。皮膚^{かほ}だけ残つてゐたのを切断したのです。

林 食べる方は

上野 いつも御飯を残してみましたね。しかし近頃は「食ぶにが出来た」と言つて、甘藷など一〇目位食べたことがある。いつだつたか高橋先生が来られ「何が一番好きか」ときかれると「餅と饅頭」と言ひ……。

石本 正月の餅など一度に食べると言つて笑つた。

上野 食べる時に食べてほしい間食が嫌ひな方で。

林 「穂波」はいつからかね。

石本 霊交会に入つてから……。

小見山 此処に来てからキリスト教になつたのですか。

石本 さう。寄りつき難い、つき合ひ難いとよく言ふが、その点私と同様あの人も大分顔で損をしました。

林 随分、茶目だつたんだらうね。岸野さん何か。

岸野 私には詳しく判りませんが、人前に出る様になつてから身の廻りのことに一番気をつかひました。

石本 左の腕に「天龍」と刺青をしてゐたことは誰も知らぬのではないかと思ふ。林先生はお気づきでせうかしら。あれはこゝであんな刺青が流行つたことがあるのです。その頃。

大原 私は別にないのですが、

岸野 もう一言つけ加へさしていただきます。笠居さんが先に仰有つた俳句で徳島から三十円貰つたことですね。その頃、私の良人の岸野がお恥しい事ですが博打に負けて終いまして借金に困つた揚句、長田さんから三十円そつくり借りたやうな訳なのです。私はそんな関係であの人の身の廻りの世話をするやうになつたのです。

石本 長田さんはあれで仲々負けん気が強かつた。入所してまだ間のない頃の事ださうですから、大分昔の事なんです、何でも部屋で御飯を食べてゐた時、汁杓子が何かとで喧嘩になつたさうです。相手はいつも弱い者いぢめをする人だつたのですが、その時長田さんは「相手なら俺が成つてやる」言つて腕まくりしたので相手もその勢に恐れ、「こんど来たのは若い喰へないぞ」と、言ふことになつたんださうです。

岸野 長田さんが二十一、私が十九の時ですからちょうどその頃の話なのですが、ある静かな秋の晩、私が一人で西の浜を散歩してゐると、向ふからやはり長田さんが来られたのです。何方も同県の事ですから二人は其処の砂の上に腰を下して故郷のことをいろいろ話合つてみました。すると、長田さんが突然「帰るのがおそくなると部屋の者が心配して捜しに来うも知れんし、こんな処で二人が話してゐるのを人が見たら、又、どんな噂をするかも知れん、帰れ帰れ」と言つて私を追歸したことがあります。/それからこれは未だ誰にも話したことがないのですが、却つて長田さんといふ人を知つていたゞくのものによいのではないかと思ひます。昔、夫婦仲のどうもしつくりゆかぬ人があつたのです。いつも口喧嘩をしてみたのですが、ある時、女が「あんたのやうな甲斐性なしの男と一緒に暮すのは馬鹿々々しい、同じ世活をするのなら長田さんのやうな立派な人と一緒にになりたい」言つたのです。ところが男の方もあつさりしてゐて「お前がそんな気持ならよくわかつた、きれいさっぱり別れてやるから長田さんと夫婦になれ」と言ふことになつたのです。で、まあそのお使に私になつた訳なのです。私が長田さんの処に行つて訳を話すと、長田さんが言ふのに「私は女に世話をして貰ふ資格のない人間だ。小遣だつて三宅さん(官之治)に貰つてゐるのだし、そんな話を受ける訳にはゆかぬ。向うの女も女だが、そんな使に来るあんたもあんたぢや」と、まあその時は大層私叱られた事があるのです。長田さんも後には夫婦生活をするやうになつたのですけれど。

土谷 つまり亡くなられた鈴木さんですね。

岸野 さうなんです。「みそらの花(自著)」の中に鈴木さんのことを「髪は長くて美しい哀れな女」と書いてあります。

土谷 鈴木さんとはどんな経緯で結婚したのですか。

岸野 恋愛結婚だつたのですが、鈴木さんの前の良人が亡くなられます時、「自分が死んだら長田さんを頼つて呉れ」と遺言して逝つたのです。そんな訳で鈴木さんは何彼につけ長田さんを頼つて行つて居るうちに、到頭、恋愛から結婚したといふ訳なのです。そして長田さんは死ぬるまで亡き鈴木さんの残り香を偲んでゐたやうに思はれます。亡くなつた長田さんの筆筒の抽斗には着物や帯やその他身の廻りの品物がちやんと蔵つてありました。

土谷 さうですか。それは本当に珍しい話でした。人間長田さんの淨い美しい処が充分窺へま

す。

岸野 私もこの事は話した方がよいか如何かと迷つてゐたのですが

石本 「青松」の座談会で青年を大いに励ましたことは先刻浅野君が話したが、本人も「自分が読み書きしなかつたらやくざになつたらう」と言つてゐました。「天龍」など、刺身をした位ですからね。それから甘藷は何方かと言へば柔いのが好きだつた。今迄、話に出なかつたと言へばそれ位かなあ。園長先生もお葬式の時仰有られたが、どうもこの頃影が薄くなつてゐた様に思ひますね。

斉木 髭のことを先刻林先生が言はれたが髭はある方が写真にしてよかつたと思ひますね。

石本 死顔のきれいな事は昼寝の顔以上だつたと思ふね。

斉木 たとへ宗教は異つてゐてもあの静かな死顔を見ると「昇天」といふ事を沁々思はされま
すね。キリストによく似てゐる。

石本 あの席で山谷さん（現霊交会員）とも話したのだが。

河淵 誰もさう言ふらしいね。

浅野 兎に角、吾々はこれから長田さんの遺志を承いで大いに努力すべきだと思ふ。

小見山 葬式の時、林先生が朗読されたあの原稿ですね。聴いてみてほんとに沁々させられました。

石本 ペンを持たずと仲々強硬な事を言ふ方でした。

林 あれ以外（朗読した新日本建設）にも相当きついこと言つた。

三木 どうも長い間、いろいろとよいお話をきかしていたゞき、長田さんも微苦笑されてゐることゝ思ひます。だいぶ時間も経ちましたので座談会はこれ位で終つたらと思ひます。林先生、高橋先生にはむさ苦しい処にお迎へしてお疲れでせう。皆さんほんとに有難うございました。/
散会、三時半

霊交会教会堂図書室には、さきにみた石本による「後記」と題された手稿とともに、藁半紙に鉛筆で書かれた座談会記録がある。これが「経過報告」にいう霊交会による座談会の記録とおもわれる。だが、その確証はないし、どうも座談会の談話すべてが筆記されているわけではないようにみ

える。ともかく、ここにその全文を転載しよう（適宜読点をつけた。／は改行をあらわす）

石本 先づ先生方の方からお話を願ひませうか、林先生いかゞです、

林先 高橋先生など話したくてむづむづしてらつしやると思ふが、まあ中の方から、

石本 首出子のこと、永住地のこと等、

林先 それはぜひ取つておいて下さい、

石本 ではこちらの方からとして、先づ林さん……、

林 私が入会当時、長田さんの聖研は毎日十二時から一時頃までありましたが、恰度昼寝の時刻でありますので、目をつい〔つ〕ブツテみると長田さんの声の子守唄の様にうつうつとしてこつくりこつくりろをこぎ出す、そうすると長田さんは聖書の研究をやめる、すると目をぱつちりと開けるといふようであつたが、それでも熱心に聖研に出た、その頃、高本さん、青木さん、長田さんと聖研だけでも一日に三回位やつてみました、

林先 青木、長田ともう一人は誰？、

林 高本唯一といつて小豆島から来てみました兄弟、

林先 その高本といふのはこゝの政治に何か関係してゐたの？、

石本 協和会の幹部などもつとめ、殆んどずっと役職にありました、

林先 青木は何年から何年頃までゐたの？、

石本 大正五年頃からでせう、私が来た時はもうゐたのですから……、

林先 青木が出たのは、

林 大正十二年の冬か大正十三年の春でせう、

林先 こゝから沖縄へ行つたのか、

林 こゝからは回春へ行つたのです、

林先 こゝで信仰をもつて回春へゆき、それから沖縄へ行つたのだね、

佐ト 私は入所して廿五年になる古い方ですが、長田さんを知つたのは十五年程前のことです、私は宗教については殆んど無関心でありましたが、同郷の人に旭といふ兄弟があり、その兄弟が信者でしたが、或る人の五十祭が部屋で行はれました、長田さんが説教されまして、この人は何

と固い話をする人だなアと思つて聞いてみたが、何時の間にか皆がわしを説教屋にしてしまつたと云つて、それからいろいろ砕けた話をせられ、この人は面白い人だなあと思つた、そんな事が動機で求道をはじめました、それから御指導をうける様になりました、厳格でライラクな面白い人でした、

石本 花田さんどうぞ、

林先 あんたの這入られたのは何年頃？、

花田 大正七年です、

林先 やはり迫害のひどい頃でしたか、

花田 私は三宅さんと同室でしたので全く直接迫害といふ様な事にはあひませんでした、つまり温室育ちです、

石本 花田さんは、三宅さん、長田さんと永く同室に居られたのです、

林先 何年位一しよにみましたか、

花田 十年程です、

林先 三宅さんは、あんな円まんな人でしたから敵はなかつたでせうが、長田さんは齒にき又をきせずに云ふ方でしたから敵はなかつたかね、

石本 靈交会員には遠慮なくキツイ事を云つて居られましたけれども、他の人にはそんな事はありませんでしたから、敵と云ふほどの者はなかつたと思ひます、

花田 それは三宅さんの事でも蔭ではかれこれ云つてみたのでせうし、三宅さんは好きだけでもキリスト教を信ぜねば好ひ人だが、などいふ事をよくきゝました、

林先 長田さんが洞穴で勉強したといふのはどこら？、

林 今の納骨堂のたつてゐる横です、

林先 その中でトカゲをならして一しよにあそんだと云ふ様な事が穂波実相が何かに出てゐたね、その洞穴で何年位勉強したんだろう？、

花田 私の入所当時はメシを喰べたらすぐに行つて居られました、

林先 共同生活の中では勉強ができないからね、

杉田 僕は文芸的方面から長田さんに近付き、自然、宗教とはどんなものかなどと理屈を云つ

て宗教的にも共にかたる様になりました、長田さんは霊交会に既成信者と求道信者とがある、既成信者とは自分勝手にきめてゐる者、求道信者とは常に神を仰いでゐる者で、そこに本当の恩恵があるのである、コップーパイの水でも神が与へ給ふたものとして感謝してうける事が出来る、既成信者は祈が上手、讃美歌が上手、水一ぱいでも当然と考へる者が既成信者であるなどよく話して下さつた、

大西　私は入所以前に怪我をしましたが、時々非常にやさしい牧師さんが来れて長田先生の話をして下さつた、私は真宗でしたけれども大島に行けばキリスト教に這入らうと思つてました、そして葬式のときの感話に感心致し折があればキリスト教にぜひ入れて頂かうと念つてゐました所、同室の高本兄に導かれて集会に出るようになり、長田さんが日曜日曜の集会に必ず説教をして聖書をあらゆる方面から説いて下さつた、洗礼は岡本、佐ト、赤沢兄と私の四人でエリクソン先生が送別会に御来島のときうけました、その受洗準備教育の聖研も長田さんがして下さいました／昭和十八年四月総代になられるときまで毎日午後一時から聖研会を開き、来うと思ふ人だけ二人でも三人でも結構だからといつて、暑い時、寒い時にも一生けんめいに講義をして下さつた、晩にでも聖書の事をきゝにゆくと、あゝだこうだと親切丁寧に教へて下さつた、山の上までゆくのは形式だ、信仰はどこにゐてもできると云つてきらぶ者が部屋にあるかと云へば、父の家、祈の家、清い所で静かに祈れば本当に神の特別のお恵がある、神は必ず思はぬ特配を下されると訓へて下さつた、総代になられてからは忙しいので休まれましたが、それ迄は日曜学校、礼拝、夕禱会には必ず来られました、私は求道一ケ年、信者になつてから五年間、都合六年間御教導を頂いたよい先生でした、

林先　長田さんから教へられた聖句で一番印象に残つてゐるのは・・・／彼の上に神の業の現れんニなり、かね、

大西　父なる神、子なる神、聖霊なる神について、教へられた事は忘れられません、

林先　入園してすぐ教会に這入るとそうもないかも知らんが、暫くして転宗するとたゞかいがあるだろう？、

大西　私は入信前は日本人は日本の神を信じて居ればよい、何も外国の宗教を信ぜんでも・・・と思つてゐたが、長田さんから教へられて自分の考が間違ひであつた事をはじめて知りました、

兵庫県から一僧侶が来られて、この病人はよくなつて帰る人がない、みんなくさつてしまうのだ、と云ふ意味の事を云はれたので、病きの軽い本田さんと云ふ人が、俺はこの島に来てみても何も君のお世話になつては居ないとおこり出したが、その時は総代さんの鎮撫によつておさまりましたが、その時長田さんに、今日の説教はどうでせうとたづねました所、あれが本当でせうよ、病気の軽い人は皆治つて帰らうと思つてゐるから腹が立つのが当然でせうと云はれました、

林先 それは何年頃？、

大西 昭和十六年の秋の事でした、

半田 長田さんは折角先日も集会で話された様に理想家で大願望家でありました、もちろん天につけるもので地につけるものではありませんが・・・、それを世俗的な事には無とん着でありました、たとへば被服などでも・・・必要なものはその都度与へられるといふ信仰をもつて居られました、石井十次先生の話などよく引いて話されました、靈交誌発行当時少し原稿を書かぬかとすゝめられて短歌を少し出した事もありますが、書く人がなければ自分一人でも書くといつて居られた／随分精力家であり信仰の人でありました、私の感じでは長田さんの説教は長過ぎたと思ひます、暑い時や寒い時一時間も一時間半もやられると、やつてゐる方も一生懸命であるが、聞く方もねむくなつたり汗だくになつたり、もう止せばよいのにと思つた事もありました、御皇室に関する事で、陛下はどうなるでせう、陛下には罪ないでせうかと訊ねたとき、聖書的に云へば義人なし、一人もなしです、陛下もキリスト様をお信じになればよろしいがね、然し畏るべき者をおそれ尊ぶべき者を尊び、王は尊ぶべきですと教へられました、

河淵 私は長田さんと二十何年も同じ棟の下で生活をしました、自分は真言宗でありましたが同室に熱心なるクリスチャンが五、六人居りまして、朝は祈り会、昼は外で五、六人で聖書研究をしてみましたが、それに感化せられて私もキリスト様を信ずる様に導かれました、靈交誌に身の上話を書いて持つて行くと、そこにおいておけ、みて直してやるからと気安くいつてくれました、長田さんは原稿など書く時は夢中で誰が何をいつても耳に入らぬ様子でしたが、済むとさあ小説を読むから、新聞をよむから、来いよーと大きな声で呼んでくれました／以前頃は洗濯場の裏にあつたテントで早天祈禱会を二時頃から開いて居りました、靈交会に導かれてからはみねむりをし乍らも長田さんの聖研会に出席して居りました、讚美歌も大きな声で唄へ、身が温くなつ

て健康にもよいからといつも云つてみました、今回長田さんが香川寮に這入られたので、私がかんごに行くと、おゝよく来てくれた、遠慮がなくてえゝはと云つてよろこんでくれました／長田さんはあんなに早く亡くなりましたが、臨終が近づくに従つていよいよ崇巖に顔はかゞやいて参りました、キリスト様の顔によくにてみると山谷さんとも話した位です、十七日の午ご七時頃、園長先生、高橋先生、林先生が御診察下さつた時にも、園長先生が心臓が少し悪いねとおつしやると、私は心臓は強い方でありましたが、今度はやられましたとぞうたん（冗談）を云ふて居りました、すると先生は、長田さん、その位なら大丈夫だよと云はれました／長田さんと松田君と私と三人で祈つて居りますと、主によりて死ぬる、死人は幸なり、主によりすぎる者は祝福を受けん・・・と云はれましたが、それが最後の言ばとなりました、そうして背中をさすつてみた私にもわからぬ位しづかに召されました、せめてもう一日でも二日でも傍で看ゴをさせて頂きたかつたと今でも思ひます／不信仰な私は長田さんのかんごに行つて大変教へられおめぐみをうけました、

林先 園長さんが出られたのは何時頃？、

河淵 午後七時頃でした、

林先 それからはぞうたんは云はなかつた？、

河淵 石本さんは九時過ぎに帰られ、山谷さんもまもなく帰られた、それからコタツを入れて作業特配の芋三百匁ほどをうででお茶を二口三口呑んだのが最後でした、電キが消えたのではつきりはわからぬが、どうも布とんを＝〔ふ？〕みぬいで居るらしいので、風でもひいては布とんをかけて背中をさすつてみますと、気もちがよいと云ひました、それが十二時すぎでせう／この肩を去年患ふてからはどうも調子が悪かつたなど云つてしづかになりました／おつさんはねてゐるのではないか、風でもひくといかんからお前とねよと松田さんが云ひましたが、私は背中をさすつて居りました、ところがどうも余りしづかなので、長田さん、長田さん、長田さんと呼んでもどうも様子がちがふ、ゆすぶつてみると身体全体がうごく様なので、これはいかん、早く火をつけよ、石本さんを読んで来いと云ふので、私は窓を開けて監督さんと呼ばれた様なしまつてした、

林先 主によりすぎる者は幸なりと云つたのは何時頃？、

河淵 十七日の午後四時頃か六時頃でしたとせう、

林先 香川寮に行つてから意識がわからなくなつた事があるかね、

河淵 部屋にみた時にはわからぬ様になつた事があるそうですが、香川寮へ行つてからはそんな事はありませんでした、高橋先生が来られた時、私は赤ん坊の病気をやつたんだそうですとぞうたんを言つて居られました、又高橋先生が何か好きな物はないかとたづねられる、餅とうどんが一番好きで、以前は餅といへば目がない程でしたが今はどうですかしら・・・と、高橋先生が何か好きな物があれば遠慮なく云ひなさいと云つておいて帰られ、高橋先生が帰られると後で、何か好き物があれば言へといつたつて何か好きだから下さい、之が好きだから下さいと、そんな事こちらから言へるかのうと話して居られました、

大西 ずっと以前から召される事はよく云つて居られましたね、

河淵 空襲の時、五十二号の坂根のおばあさんの手を引いて中野さんが迷ふてみると、海岸でお祈りをして居られた長田さんが、こゝへ来い来い、こゝに居れば大丈夫だと云つて呼んで下さつた夢を見た事があると長田さんの死後にきいた話です、

赤沢 私ははじめ仏教でしたが精神的はんもんの末、山上で唄はれる賛美歌に心ひかれてみた時、恰度同室の兄弟に導かれて求道する様になりました、

林先 いつ頃でした、

赤沢 昭和十四年です、印象は不思議な人だ、牧師ともちがふし・・・然し長田さんは余り熱心すぎてわかつた様なわからぬ様な精神状態で、一時懐疑思想に捕はれておりましたが、長田さんの召天にあひ、幾分氷解した様な気が致します、

林先 信仰以外では特別の交渉は？、

赤沢 昭和十八年、長田さんの総代の時、自分は庶ム部主任をつとめました、

杉山 私は小さい時から日曜学校で大変お世話になりました、苦しい事や辛い事を自分では解決をようつけずに御相談に行きますと、そんな事は気にすることはないといつて何時も笑つておりました、私も大変慰められ力づけられまして、私も一しよに笑つて帰るのが常でございました、

林先 長田さんは何年位日曜学校をやつたんだ？、

石本 昭和の初めごろやつておて、それから少しの間、大川、三好、尾崎兄などがやつておりましたが、六年頃から又はじめ召されるまでずっとです、

岩本ハル 私も長い間、長田さんにお世話になりました、今でも一番よい事だと思つて忘れら

れないのは、長田さんが今年是一年一ぺんも腹を立てなかつた、今年は一ぺん腹をたてたなど云はれた事であり、人間には神の心と人の心とあるから、話の序には感情のゆきちがひで腹をたてる事がよくありますが、之は長田先生に習ふべきであると思はれます、私は昭和九年四月一日井戸端で洗濯をしてひよいと頭をあげると目が見えなくなりました、昭和八年四月に高橋先生がおいで下さつてみましたので、手術をして頂き今日の様にいやされました、手術をして頂いてその年の芝居にゆき、芝居を見るのではなく電とうが何ぼうついてゐると云ふのがわかるのが楽しみであつた、盲目がイエス様の衣のすそにでもさわればいやされると信じてみたやうに、私は神様が降られるなら、成るべく私の近くに降つて下さる様にと祈つた事もあります、眼科の専門の高橋先生がこの島に与へられてみたといふ事は本当に感謝でございます、礼拝に上る時、洗濯場の裏の岸からころげ落ちた事がありますが、その時もけがをせずすみしました、或るお方がとんで来ておこして下さいました、神様はこの世のけはい？道を歩む時も必ず守り給ひます、眼の治療の時も十字架のイエス様を偲んでみると、苦痛がやわらげられました、長田さんの聖書の研究によりお導きによりまして、今日迄平和にすごさせて頂きました、

芥 私は長田さんと奥さんにも大変お世話になりました、それで長田さんや奥さんの洗濯も全部私がしてあげました、又長田さんの代用食も私がたいてあげてみました、浜に行つて貝など掘つて来て、うどんでもたいて上げると大変よろこんで居られました、一貫ほどの芋がありましたので、それをたいてくれと頼まれてみました、そのうちに入院せられましたのでたづねますと、たいてくれといわれ、たいてはけでて附添の人たちに喰べさせられました、餡が喰べたいと云はれるので少しこしらへて上げますと一匙ほどたべられただけです、

河淵 正月の為に代用食のメリケン粉を残しておくのだと云つてみました、

林先 長田さんが今こゝにゐればどう云ふだらう、このみかんはカザツテ置くのか・・・と、

森 私は長田先生と別に懇意にしてみませんでした、入所当時、讚美歌を大声で唄つてゐるのを下で聞き、不自由な人達があんなに呑気に歌など唄つてるのはどうしたんだらうと思つて思つてみました、私の家庭は神道です、私は昭和七年四月入園し、十月に霊交会へ入会致しました、信仰あればこそ不自由な者があんなに呑気に唄つて居られるのだとはじめてはかりました、長田さんは誰とでも気に合ふた話をせられました、又神様は必要なものは必ず与へられると云

ふ事で、お父さんもう無くなりましたよと云つて空かんを投げ出して置けば、入用の物はきつと与へて下さいます、聖書研究会などでもよく身の上話をして、ユーモア的にお教へ下さいました、

山本 私は大正四年から求道させて頂き、それからずっと聖研会、礼拝堂で教へられました、私をはじめ全く宗教に重きをおきませんでしたので、むつかしい話の時はよくゐねむりをして居りました、集会の時には何と固い人だと思つてゐましたが、修養団の幹部会などには面白おかしく誰にでも合ふ様にその場その場の空気をみて話されました、固いばかりではありませんでした / 私は何時でも三宅さんと長田さんを切りはなしては考へられませんでした、頼るべき者を頼れ、国籍は天にあり、天に望みをおく様にと教へられ、私は盲目になりまして淋しい時、悲しい時にも祈りの人、信仰の人、三宅さん、長田さんに導かれて参りました事は、本当に仕合せでありました、礼拝に来ると、どうです、と何時もきかれましたが、その都度、肉体の健康は？霊性上の健康は？とたづねられる様な気がしました、この頃は信仰はどうです？とたづねて頂いてゐる様に・・・お話や色々な事をなつかしく偲ばれてなりません、

岩本花 私は小さい時からS.Sで御指導をうけ受洗の時には特別準備教育をして頂きました、司会があたつてお話をお願いにゆくと、あゝ之度はあんたかな、よろしいよろしい、と心よくおひきうけ下さるので、帰る時には信仰をはげまされて帰るのが常でありました、

松の 私は昭和十六年入園しまして健康舎に一ケ年程居りまして、目が悪くなり不自由舎に這入りました、元気な時は余り感じませんでしたけれども、不自由になりましてから、ヤア上りましたネ、と云はれますと本当にうれしくございました、長田先生が亡くなりましてから淋しくなりました、

藤本 私は三宅のおつさんや長田さんの言ふ事をきいて守つて居れば罪はつくない、決して悪い事はないと信じてゐました / 私はみんなが、おばあ今日は休んだらと云ふ様な雨の日も風の日も、うんにや之がわしのつとめだからと云つて、この礼拝堂へ上つてくるのが何よりも楽しみであります / そしてこゝへ来ると、おつさん、長田さん、今朝も来ましたよ、さあーしよに祈りませうといつて祈ります、それだけが楽しみです、

川田 私は長田さんとは余り近づく機会がありませんでしたが、不自由舎のかんごに行つて茶碗を洗つて上げませうといふと、結構、結構、私の舌はきれいだから・・・と遠慮深い方で、

自分の方からあれをしてくれこれしてくれと、自分からは絶対に言はれませんでした、おかずの事などについても外の人からはらいとかあまいとか、くじょうを言つても、長田さんは決して苦情を言はれませんでした、よめ泣かせではありません、あの口の悪い手のわるいのには飯が早くて皆より先にすませて机の前にゆき、小さい声で讃美歌を唄つて居られました / 何でも笑つてすます人でした / あの訓す様な叱る様に教へて下さつたお姿が目につく様です、

石本 (みかんを喰べ喰べ) 長田さんは何でも皮ごめたべて居られました、バナ、でも何でも鶏卵でも・・・然し卵のうでたのは皮がかたいといつてみました、

林先 高橋先生何か、

高橋 何もありません、

林先 特に長田さんが尊敬してゐたといふ様な人があつたかね、

石本 別に・・・聖書中心でしたね / 藤井武全集や畔上賢造全集や内村先生の口マ書研究など、

林先 藤井先生の打ち給へ、打ちてすゑ給へ・・・とか言ふ歌を引いて話してゐたね、

石本 そうです、

[この林先と石本の発言のうえに貼り紙があり、そこにペンで「うちたまへ御存分にうちてすゑたまへ / むちの下よりただわれすがる」と記されている]

林先 聖書はどこが一番好きだつたらう？、

石本 ヨハネ伝です、

林先 やはり詩人だね、

石本 ヨハネ黙示録の研究を一回してくれた事があります、

林先 英語やギリシヤ語で研究してゐたんだね、

石本 辞典位でせう、

林先 讃美歌を大きな声で唄ふのはよい事だね、下の者たちが聞いて・・・、大きな声で唄ふのは靈交会の伝統か、

石本 そうです(そうですかと笑声) / 長田さんが譜など少々ちがつてもかまわぬから、心から大声で神を讃美せよと指導したんですから、

林先 三宅さんも声が大きかった？、

石本 いや三宅さんは小さい方でした、

林先 光田先生も大変讚美歌が好きでね / それから之は話がちがふが国頭には早田園長も松田女医も元気だそうだ、病友は七百五十ほど、まだ百五十ほどは山の上から下つて来ないそうだ、もつとも之は去年の十一月の話だが

「経過報告」に記された2回の追悼座談会のうち、あとに開かれたその記録がこの藁半紙の裏(表には自治会の規則か細則がガリ版で刷られている)に鉛筆書きされた上記文書だとすると、その内容は穂波の回顧でありながら、出席者それぞれの信仰の経緯でもあり、まえの座談会記録とくらべると、とりとめもない、ざっくばらんな内容に見える。とくに事前にきちんとした準備のない座談会とはそういうものであり、上記文書はそうした座談会の発言をそのままメモした記録かもしれない、まえの座談会記録はメモにかなり手を入れたうえで『青松』に掲載したのかもしれない。あるいは、あとの座談会はあまりにもまとまりがなく、その記録がどこにも掲載されなかったのかもしれない。ともかくその詳細は不明である。

ただ、つぎの1点だけは確認しておこう。別稿「長田穂波遺稿」でわたしは、まえの座談会記録などを用いて、穂波の死がいつそう清められ聖なるものと崇められるようすを、穂波とその死の「祝聖」とあらわした。まえの座談会記録では、複数の出席者の談話をとおして穂波の死に顔のようすが再構成され、彼の最期をみとった河淵朝馬が「誰もさう言ふらしいね」と追認していた。これについて上記鉛筆書きメモをみると、河淵は「長田さんはあんなに早く亡くなりましたが、臨終が近くに従つていよいよ崇巖に顔はかゞやいて参りました、キリスト様の顔によくにてみると山谷さんとも話した位です」と、まえにくらべてことば数が増え、穂波の死に顔が荘厳だったようす、それがキリストに似ていたことを証言している。穂波とその死が、想起されるたびに聖化されていったとうかがえるのである。

『楓の蔭』 『青松』第17号の「あとかき」には、「本巻は場合によつたら全部といふ訳にもゆかぬらしいが、MTLの方で印刷して下さるかも知れぬ由(林博士談) これもひとへに長田さんのことだからである」と記されていた。逐次刊行物『日本MTL』はこのころ『楓の蔭』と紙名をかえて

発行されていた。その第175号(1946年4月1日)には、三豊奨健寮生「『穂波追悼』読後感集」が掲載され、次号第176号(1946年5月1日)には、穂波の「新日本建設(二)……青松園の場合……」が、「昨年十二月十八日急逝された長田穂波氏の最後の力作となったものである」との紹介がついて転載されている。このころの『楓の蔭』は手書きガリ版刷りだった。抄録ではあるが穂波の「遺言」ともいべき絶筆が、『青松』よりは発行部数の多い媒体に転載され、穂波の遺志がいくぶん広く伝えられたのだった²⁸⁾。穂波への哀悼が綴られた『青松』は手書きで、『楓の蔭』は手書きガリ版刷りだった。より広く穂波を追悼するための活字媒体はなかったのだろうか。

『穂波追悼』 長島愛生園図書室にあった『穂波追悼』をここでみよう。活版印刷で表紙と本文11頁立てとなるこのパンフレットには、著者兼発行者として石本俊市の名が記されている。1946年3月16日の発行である。表紙には「大島青松園/霊交会」の印字もみえる。内容は、まず石本の「追悼感話」、ついで矢内原忠雄や野島泰治の「弔文」、そして穂波自身が用意しながら彼によって披露されることになかった「昭和二十二年/クリスマス祝会感話/大なる暗示」²⁹⁾、べつなときの感話や穂波の未発表原稿とおもわれる稿へとつづき、「追悼座談会」があり、「後記」となる。『青松』第17号とみくらべると、「追悼感話」はいくつか表記の異なる箇所があるもののほぼ同文、「追悼座談会」は「故長田大人を語る座談会」の紙幅を減らした再編集版とわかる。そしてこの霊交会代表としての石本が執筆した「後記」の元原稿が、さきにみた石本によるとおもわれる手書き原稿「後記」だとわかる。

その「後記」についてみると、元原稿の削除と追記がほぼそのとおり反映され、さらに推敲を経て成稿となり、活字に組まれていたとわかる。元原稿になかった1文として、「又、長田兄の祈がきかれ、第二の穂波として灯火を翳す指導者の生れる事を信じます」がここにはくわわっている。大島では穂波の歿後直ちに、葬儀と座談会と『青松』誌上の特集としておこなわれた彼の追悼は、穂波がまさに心血をそそいだ機関紙『霊交』の残りの印刷用紙を使って活版印刷の『穂波追悼』を発行することで、その追慕をはっきりとしたかたちとしてあらわし、また、追憶に1つの区切りをつけたようにみえる。

²⁸⁾ これについては前掲阿部「長田穂波遺稿」を参照。

²⁹⁾ 「本文は二十五日の日曜学校合同クリスマス礼拝の為、プログラムと共に用意せられてゐたもの、死後見出され当日、石本が代読した」と記されている。

だが、穂波の「遺書」として葬儀の場で朗読された「新日本建設と青松園」は、その後、遺稿選集にも収録されず、読まれることのない絶筆となるのである³⁰⁾。大島では、穂波の遺稿も、穂波の精神も忘れられてゆく。

穂波の顔 手書きてづくりの『青松』第17号には、穂波の2葉の肖像写真が貼りつけられていた。扉のつぎの丁に貼られた1葉は、おそらく、医官の林文雄が「彼の良い写真がないので^(横)剖見台上で撮影する」と記したそれなのだろう(林文雄「臨終前後」『青松』第17号)。この肖像写真は、穂波の遺稿選集第1巻となった『福音と歓喜』(聖約社、1950年)にも掲載されている。そこには、「長田穂波氏 昭和二十年十二月十八日逝去 / 同十九日撮影」のキャプションがある。これらの写真は同一にちがいないのだが、林の「臨終前後」でさきに引用した記述は、穂波が息を引き取ったその直後のところにおかれている。そうだとするとこの遺影は、林が撮影したというそれとはまたべつの1葉だろうか。

『青松』第17号と『福音と歓喜』に掲載された、正面よりいくらか左の横顔をとりえた穂波の写真と異なる角度からとられた1葉が、またべつにある。さきに記した、2009年4月に霊交会に寄贈された橋新旧蔵写真の1葉である。それは、穂波の右の横顔を写している。服装や髪のようなから、おそらくおなじときに撮られた写真だともう。穂波の死からそう時間を経ないところで、正面からではなく、左右双方の角度からその顔を写した2様の遺影があったのだろう。

もう1葉、『青松』第17号の目次と巻頭言とのあいだに貼られた(わたしが閲覧したときには、写真はそこはべつな頁のあいだにあったが)写真は、園長や子どもが同誌に記したとおり、クリスマス準備をしているときに写されたのだろう。園長の野島泰治は追悼号に寄稿した「偉人「長田穂波」」のなかで、「去る十二月、病床に倒れる迄に、既に其の月二十五日に行はるべき、終戦最初にふさはしいクリスマスの総ての手配準備を完了」していたと記し、日曜学校で穂波に教わっていた赤松清子は、「先生はとてもクリスマスを楽しみに待つておられました。もうクリスマスの支度もちやんと整へて居られました。そのクリスマスも出来ない中に、天国に召されたのです」と、もはやいない穂波を惜しんでいた。穂波は着るものには無頓着だったという。クリスマスツリーの脇

³⁰⁾大島での逐次刊行物と穂波の論説にあらわれた療養所の歴史については、阿部安成「癩と時局と書きものを」(黒川みどり編『越境する歴史学』仮称、解放出版社、2010年刊行予定)で議論した。

に座る穂波は、Yシャツとジャケットの姿で写っている。

わたしの霊交会での調査は、穂波を知ろうとするところから始まった。活版印刷で公刊された著書、日記、霊交会会員や賛助者や支援者、そして他の療養所にも寄贈されていた逐次刊行物などがみつかった。ただし、日記は1冊1年分かぎり、逐次刊行物はその初期の号が所在不明で、霊交会創設時や機関紙『霊交』創刊時の穂波についてや、彼の末期のようすについては、遺稿選集が1巻だけあっても、十分な情報がそろっていなかった。

その後、霊交会教会堂図書室で手書きの原稿や穂波への追悼文がみつきり、入所者自治会編集室にあった手書きでづくりの『青松』をあらためて閲覧し、島外で活版印刷の穂波を追悼する冊子がみつきり、また島外で刊行された第二次世界大戦直後のガリ版刷り逐次刊行物を見るなかで、わたしは、戦争と敗戦と戦後を体験した穂波が、文芸という技術と才知つくりかえようとするとともに、みずからをもこれまでとはちがうなにものかに轉身させようとするようすをとらえた。わたしはそれを、穂波の化生 (transformation) とよんだ。

こうした観点からわたしは、信仰心の篤い島の聖人にして文人とのみあらわされてしまう穂波像を質そうとした。この作業は、ひいては、闘いの場としてのみ、抑圧された場としてのみ 癩=ハンセン病 の療養所をあらわす歴史像の修正にもつながるとのみとおしがある。もちろん、わたしが提示する穂波像や療養所像、あるいは 癩=ハンセン病 のようすも、わたしが切り取った事態の1面ではある。この自覚を保持したうえで、残った記録としての史料とのいわば対話をくりかえすなかで、どのように 癩=ハンセン病 の歴史をあらわすことが適切なのかを確かめながら手探りで歴史を書くことが、わたしの仕事だとおもう。

穂波の遺影が、彼の追悼号である『青松』第17号と、遺稿選集第1巻の『福音と歓喜』に掲載されたあの1葉しかなかったとしたら、キリストに似るといふその横顔の印象が確固とした歴史として定着しただろう。だが、それとは異なるもう1葉の遺影がみつかった。これは穂波の横顔をとりえる^{アングル}角度が平板で、とうてい彼を聖なるものに祀りあげるアイコンにはなりえない。だが、横顔の遺影は1様ではありえないとあらためてわたしたちに知らせる大きな意義を、霊交会に寄贈されたいくぶん右顔寄りの穂波の遺影はもつのである。

「ほつといてくれ」(『清流』第3号、1941年。なお同号の目次の「詩苑」には穂波の名もその作品名も記されていない)

ほつといてくれ……！ / 詩人の信仰は / ……我儘だつて……？

俺はヨナよりも / もつと、もつと / 怒りもする / すねも為るよ / 無理な祈もするだらふよ

それが何うして悪い / それが何うして不信仰だい / 天地の内に / 唯一の“父なる神”ぞと / 全任しきつて居ればこそだ！

何程、苦情があつても / 何が何でも / 神は俺の父さんだ / この念に一点の狂ひはないよ / この“子心”は / 他人行儀な形式的な / そんな態度であられるかい！

教会主義の / 無教会主義のと / やめといてくれい / 俺は“たゞ救はれた者” / 文句なしのキリスト者だよ

偽善者奴 / 我が後に退け / 聖人らしかれとは何事ぞ / 俺を偽善者の化物にする考へか！ / ほつといてくれ……たのむ

だが……俺はどうして / かうも愚に弱い者なのだらふ？！ / 俺程、父なる神に / 大なる迷惑を常にかけてゐる / こんな馬鹿な子が / 他にあらふか……！ / 俺は罪人であるワイ！

だから俺は父の膝下を / 片時も離れられないのだ！！ / 俺が若し聖人になれば

「病堂のSS / 初の集り」(『清流』第4号、1942年。「小品」の頁)

『先生、お芽出度ふ……』 / 『やア……皆さん、お芽出度ふ……』 / それぞれに晴衣を着てニコニコと輝く顔が三十八、行儀よく並び座して、年頭の挨拶が可愛い口々から降りかゝつて来る。

/ 『どうだ、お餅を喰べましたか……ふんふん公ちやんは幾つ？』 / 『先生、ふたつ』 / 私は五ツ、僕は三ツ、二ツ、等々と恥かし相に次から次ぎと答へる。 / 尋常三年の立田君が突然声高く
＝ 先生は幾つ喰べた？、＝ との質問である。 / 『ウン……先生は多いぞ……十だよ』 / 十を！。

小さい目を丸く、驚きに見張つてゐる。五歳に成つたばかりの公ちやんは指を折つて計算し始めた。すると横側に座つた哲次君が『両方の指みんなだよ』と低い声で教へる。然し、公ちやんは丹念に左右の手の指で十と言ふ数を計算してゐたが、突然に立ち挙つて両手を高く差上げると…

…。 / 『先生おもちコレダケ、とう、とう、万歳イー、万歳イー』 / これにはドツと爆笑の渦が

礼拝堂に充満して、師弟共に抱腹笑倒、なかなか笑ひ止め得なかつた。 / 『サア.....皆聖書を開けたり.....今年も熱心にお祈りして、元気よく讃美歌を唄つて、神さまより善き訓へを頂きませう.....』 / 静に学び、心を込めて讃美し、祈りもて閉会とした。 / 皆はオトナシく礼拝して座を立ち、『サヤウナラ』を交しつゝ帰り行くのである。 / = 御父よ、彼等の身と魂とを恵み給ひて新らしき年も偕に在し給へ。 / 祈りつゝ堂を出れば、早や磯辺の方、遙に勇君の『進め進め』と号令がスキトホリて聞ゆる。(昭和十六年一月一日の日記)

〔紙幅と行論のつごうにより「灯火を翳せる者」は別稿に収録のうえ論じることとした〕

